

岡山晴彦 作

石橋の伝説

前編

肥後石工水之口橋別離

登場人物 (一幕五場) 春から秋へ

岩永三吾 薩摩に招かれた肥後石工の頭領

お鶴 その世話方

藩士永村 海老原配下の薩摩藩士

家老調所 薩摩の島津藩家老

海老原 藩の工事奉行

間者 幕府の間者

竜助 薩摩石工の頭領

凶状持ちと連れ

その他

丈八と弥熊 三吾の弟三平 調所を狙う藩士二人

お鶴の爺や 追っ手たち 薩摩の石工たち

出迎えの藩士 捕り手たち 花嫁行列と女の子

第一場 甲突川畔の茶屋

*幕前に肥後の石工、橋本丈八、弥熊の親子が登場。 (後の橋本勘五郎)

丈八 ようよう最後の橋もでかした。新政府の仰せで九州の片田舎から出て来て、仰山この花のお江戸に橋を架けたもんじや。二重橋、日本橋、万世橋、江戸橋、浅草橋、神田橋。造るときや精進潔斎するけんど、畏れ多くも天子様の石橋のときなんぞ、神仏に祈ったばい。

弥熊 これですよ種山村へ帰られる。後は頼まれた橋を気ままに造りましょうぞ。親父様は土木寮測量司の地位まで拝領し、われらの名も全国に知れ渡り申した。三吾大叔父も草葉の陰で喜うでおられましような。

丈八 叔父さは肥後の石工の束ねとして、偉い方じやった。無事仕事を完うでけたのも、その長年の研鑽と積み重ねを受け継いできたからたい。政府の役職なども、叔父さや石工みんなのもんだと思うとる。

弥熊 三吾大叔父は薩摩の地を離れて、間もなくこの世を去られた。長い間の心労で、精根尽き果てられたのじやろう。お鶴様の一周忌を済ませ、後を追うように逝かれてしもうた。

丈八 そう言えば、この江戸はお鶴様の故郷よのう。薩摩でわれらの世話の差配をして頂いた、ほんに優しうて気の付くお方じやった。

弥熊 皆が魂を込めて造った橋は、多くの人の心も繋いできたと思ひましように、有り難かことでございます。

「二人とも合掌する」

*甲突川畔の茶屋の場面となる。

*石橋の袂の桜満開の茶屋、雪洞灯り賑やかな弦歌さんざめく、外の縁台に頭巾の家老調所と岩永三吾が休む。調所が三吾の杯に注ぐ。

調所 まずは一献。辛苦に耐えておる薩摩の国でも、花見位は賑やかに騒がずば隼人の活力も湧くまい。武辺のこの地にも、佐保姫様は毎年訪うて来られる。(春を司る女神^二)

「三吾杯を押し戴き」

三吾 ここに参りましたときはとんと不調法でしたが、すっかり当地の御酒にも慣れ申した。

「暫く間をおき」 実にご家老様も薄々ご察しの事ですが、この度の水之口橋を最後に郷里へ帰るお許しを頂く積りでおります。係累は居ませぬが、一族の者が待つとりますのでそろそろ潮時かと思っております。

調所 そなたには本当に苦勞をかけてしもうた。堅固な石橋を城壕、甲突川五橋を始め、三十数ヶ所に築いてくれた。お陰で橋の流出も洪水被害も、二度と起こらんよう食い止められた。領民はもとより藩としても、幾ら礼を尽しても足りない位じゃ。

三吾 調所様にお褒めにあずかるのは、これ以上の嬉しかことはあり申さん。招いて頂いてももう九年近う月日の流れ、その間色んなことござりました。じゃが大した人身の事故も無うて出来たのは、この上もない幸せと思っております。「川面を見やり」

あんどきこの甲突川の堤に植えた桜も、無事大きく育ち良か花をつけて呉れ申す。

調所 最初当藩に招いたとき、正直言うて少々疑りの気もあり、試しに城壕に橋を架けてもろうた。今考えたら真に汗顔の至りじや。「追懐の眼差しで」

その後七年前、あの稻荷川の洪水のときよ喃。構築中の永安橋の渦巻く中にそなたが飛び込いで、礎石の安全を確かめたことがあった。

三吾 稻荷川の際は私もまだ四十代、血氣盛んな折で今考えたら冷汗ものでござります。ほんに昨日のことのよう思ひ出されます。

*暗転し、「永安橋の工事現場」の場面となる。

*暴風雨が吹き荒れ、仮橋の上に蓑笠の肥後の種山石工頭領の三吾、弟の三平、甥の丈八が立つ。脇に薩摩石工頭領の竜助たち。物見の男が走って来る。

物見 山の上ん方はまだ降り続いとるそうな。この稲荷川は名立たる暴れ川、もう駄目じや。礎石が流るれば積石も木組も流出し、堤を壊し洪水になろう。早う先手ば打って木組を解いた方が良か。

竜助 三吾様、木組は解き申そう、これ以上は危なか。堤の決壊すると村が水に浸かる。もうすぐ礎石は流るんじやなろうか。

*工事奉行の海老原が笠合羽姿で来る。

海老原 三吾殿、この者たちは、長年この暴れ川の改修に携わって来たもの。良う知つとるし理が無いと思えんが。

三吾 大丈夫でござります。これしきの水では、礎石はびくともし申はん。

薩摩石工 かと言うに、薩摩の暴れ川は山から急に下つとります。城の石濠や肥後平野の川とは訳が違い申す。

海老原 三吾殿、諄いようじやが、この者の申すこと如何かのう。こうしとる間に、どんどん水の勢いは強うなつとる。年来の苦労は分かるが、無理をせずともええ。やり直すのもやぶさかでは無かぞよ。

三吾 木組を解けば、積石は全部流れてしもうて、皆さんのこれ迄の励みは水の泡になり申す。皆々方、しばしお待ちあれ。

*蓑と着物を脱ぎ、刺し子一枚になる、皆息を呑む。

三吾 三平、命綱を付けよ。

海老原 何をするのだ。

三吾 「泰然として」 今水に潜り、具合を確かめます。

海老原 この濁流に潜るとは、無謀じや、止めなされ。

三吾 種山石工は、常に仕事に命を賭けております。〔腰に命綱を付ける〕

丈八、見ておれ、これがわれらの心意気たい。

*濁流に飛び込み暫く静寂。やがて声あり。

三吾 引き上げよ。

*全身から水を滴らせて、上がって来る。

三吾 海老原様、礎石は堅固にしとります。竜助どん安心されよ。

*皆が駆け寄り歓声を挙げる。海老原が三吾の手を握りしめ、竜助が深々と頭を下げる。

*暗転し、前の場面に戻る。

調所 そうであった。あれ以来、工事奉行の海老原殿も当地の石工たちも、そなたに心服して一丸となり工事を遂行した。お陰で築港や干拓など、他まで弾みがついて順調に進捗した、改めてお礼申す。

三吾 あんときのお疑りは、無理も無う存じます。眼鏡橋工法は元々父藤原林七が発明したものの。長崎南蛮流の計算に倭古来の術を加え、それに何回となく改良を重ねて来申した。

元々父は長崎奉行所の武士で、侍気質の抜け切らぬ所あり。それはわれらが補佐し、石橋とこれに連なる治水や干拓までも請負いました。以来肥後の種山村の石工と言えば、多少は名を知られるようになり申した。

調所 そなたの引退の話に戻るが、希望に沿うよう取り計らおう。それには理由もある。

残念なことに昨今の藩中では、次期藩主擁立を巡り、大殿様と幕閣に後押しされた斉彬様を頂く勢力が対立しちよる。当然ながら、儂は大殿様側の首魁と見做されておる。

「向き直り」

そなたはわが肝煎りで招き、また藩の戦略的な仕事も請け負った故、累が及ぶやも知れぬ。帰郷を許す故、あと僅かな期間であろうが、十分身の上には気を付けられよ。

三吾 先程からの勿体無かお言葉、三吾身に沁みて承ります。過分の報酬ばかりか、岩永の苗字帯刀を賜る身分に取立て頂き、ご恩は一生忘れ申はん。

調所 儂は疲弊し切った藩財政の立て直しを命じられた。このため藩士や領民にも苦勞を強い、その上言うに言われんやり方で、算段もせずばならなかった。「咳くように」

その衝にあつたものは、いずれ藩にとつて、好ましからざる人物になるやも知れぬ。半生を費やし再建の目処も立った今、われを拔擢された大殿様に面目も立ち、思い残すことも無か。だがそなたのことは、最も気になることじや。

*お鶴が風呂敷包みを手に登場。

お鶴 お殿様、やはりここでございましたか、岩永様も。春の宵とは申せ冷え込みます故、お二方の膝掛けをお持ちしました。

調所 いやこれは相変わらず気の付くことで恐縮、そなたも一献どうじや。

お鶴 有り難うございます。赤うなりますれば、年とはいえ慎みのない女と思われても、羞かしうございます。お気持だけ頂きます。「花を見やり乍ら」

それにしても花明かりと申しますが、夜目にも美しく咲きましたこと。私は所用がございますので、ここで失礼致します。どうぞごゆるりとなさりませ。

*お鶴がお辞儀をして退場。

調所 思えばお鶴は良う気の付く女子でな。長崎奉行所出仕の夫に早う先立たれ、儂の身内ゆえここへ引き取ったが。氣立ても器量もええのに再婚する気も無うて、三十路を早うに過ぎてしまった。大事な客人故そなたたちの世話を頼うだが、良う差配して呉れたもんじや。

三吾 お鶴様には、身内にも出来ぬほど大層面倒を見て頂き申した。われらが何とかやつて来ら

れたのも、あの方の行き届いた配慮のお陰と存じとります。

*藩士永村が登場。同時に桜の木陰から覆面をした二人の曲者が登場。

曲者 ご家老でござるか。ちと御意を得たい。

調所 いかにも調所だが、花見の戯れにしては、顔も見せずいささか興が過ぎよう。

*曲者が近付き、刀の柄に手を掛ける。

曲者 有無を言わせん、今は語らずとも分かちよろう、お覚悟。

*抜刀して切り掛かり、永村が駆け寄る。

永村 うつけもん、何と馬鹿んことをするか。

*曲者の刀を叩き落とし、捕まえようとする。

調所 おお永村さん、良かところへ来てもろた。二人とも血気に逸つとる若者であろう。放っておきなされ、いずれは藩や日本国のために役に立つ者たちじや。

永村 刀を取って立ち去れ、二度とごげんことをするな。ご家老は藩の狭間に立つて、日夜心を碎いておられる。おまんさたちには、その苦しいお立場が分らんのか。

*曲者が刀を拾い、逃げて行き退場。

調所 有り難うごわした。近頃訳も分からず、若者がいきり立ってと言いたところだが、無理も無か。儂も若かったら、ああなつたかも知れぬ。

「自らに言い聞かせるように」

諸外国が日本近海に出没する昨今、琉球を抱え中国等とも関係の深か薩摩は、その動きに敏感じや。列強の餌食にされぬよう、幕府は斉彬様の識見を頼りにし出馬を願うとる。

一方儂は藩では頑迷な守旧派と見られとる。だがいずれ、われのなしたことは、藩や国の捨石程度にはなろう。それで満足じや。

永村 ご苦衷お察し申す。ご家老、これにて失礼仕ります。

♪春宵一刻價千金 花に清香月に陰 げに千金にもかへじとは 今この時かや… 花桜木の

粧 いづくの春もおしのべて のどけき影は有明の 天も花に酔へりや 面白の春べや

あら面白の春べや… 「田村」

*謡いながら悠々と引き上げて行く。

第二場 お鶴の居宅

*下手に格子戸の入り口、中は土間。昼間、奥の居間で、お鶴が縫い物をしながら口吟む。

「言はず語らぬ我が心 乱れし髪あへくしの乱るゝも つれないは只移り気な どうでも男は悪性者 桜々と謡

はれて 言ふて袂の分二つ 勤めさへ只うかうかと どうでも女子は悪性者 都育ちは蓮葉なものぢ

やへ… 殿御 殿御の気が知れぬ…」 「京鹿子娘道成寺」

問者 御免下さりませ。 「戸を叩く音」

お鶴 春心浮かれて、思わず町方の唄など。はてどなたでしようか。

問者 江戸屋の番頭でございます。こちら様に反物をお持ちしました。

*お鶴が戸を開け番頭が入り、居間入口に風呂敷を解き反物を広げる。

お鶴 いつもの方とは違うようですが。

問者 お鶴様、久し振りでございます。と言つてもいつも姿を変えておりますので、見覚えは無

いかも知れませんが。

お鶴 あなたは江戸屋さんではないのですか。

問者 亡くなられたご主人様の手の者でした。

お鶴 私には良く分かりませんが。

問者 隠さずとも宜しうございます。公儀の隠し目付だったご主人様にお世話になった者です。

お鶴 江戸屋さんでなくば、人を呼びますよ。隣は調所様のお屋敷でございます。

問者 どうぞお呼びなさい。隠し目付だったのは、お鶴様は薄々ご存じだった筈。ご家老はご存じ無かったと言われても、世に分かれば、良くない成り行きになりましょうに。

お鶴 そんな作り話は初耳です。誰も知らぬ昔のことであれば、信じてでもお思いでしようか。

いわんやご家老様には、係わりもないものです。一体何の用ですか。人目に付かない内に、早くお引き取り下さい。

問者 お願いがあり、急ぎ申します。岩永三吾のお世話をしておられるあなたを見込んでの頼み。

彼が工事をした濠や河川の絵図面を密かに入手したく、この段取りを手伝ってもらいたい。

気が咎めるなら、在処や留守予定を教えてもらうだけで良い、後は私が引き受ける。お鶴様も

公儀の隠し目付の奥方だったからには、満更いやとも仰せられまい。

お鶴 「きつとして」 とんでもない話、夫がどんな役目を仰せつかっていたかは存じません。だ

が大恩あるご家老様と大工事に命を賭けた岩永様、それを裏切ることが出来ましようか。

あなた様の話には耳を塞ぎましょう。これきり姿を見せないで下さい。

問者 どうしても受けて下さらぬか。私も幕府の大事に係わる話を漏らしたからには、このまま引き下がる訳にはいかぬ。

*問者がお鶴ににじりよる。

*外に物音、雇いの爺やが帰って来て、戸が開く。

爺や おや、呉服屋さん、ご苦勞様。奥方様、只今帰りました。ご依頼のものは、確かに岩永様たちにお届けして参りました。

問者 へい、へい、これは毎度有り難うございます。どうぞまた宜しうお願い申し上げます。

「風呂敷に反物を包んで出て行き退場」

第三場 水之口橋の架橋現場

*河原の双楯円形の木枠組の上に切り石が積み重ねられ、石橋の原形が出来つつある背景となる。

三吾の声 それもう一息じゃ。怪我せぬようゆづくり、そう確実に下ろす。よし、念のため絵図面で位置を確かめ申そ。大丈夫じゃな。

*三吾と薩摩石工の頭領の竜助が仮橋から下りて来る。

三吾 竜助どん、これであなたに全部お教え申した。この橋の完成ももう間近じゃ、私が手を下さずとも大丈夫。ご苦労でござりました。

竜助 岩永様ともこの橋でお別れかと思うと、身を切られるように辛か。先生は文字通り寝食を忘れ、われらに橋造りの秘伝を惜しみ無う伝授なされた。薩摩石工は、先生を神様のように思うており申す。

三吾 面と向かうてそう言われれば、面映ゆか。何の、九年もの間苦楽を共にした、薩摩の人たちへの僅かな恩返しじや、お礼を申さるる程のことも無か。これで百姓や町の人たちが助かれば、私の滞在も意味があつたというもの。一段落したれば休憩と致そうか。

*竜助や石工たちが退場。入れ代りにお鶴が登場。

お鶴 岩永様、今日急ぎのお使いとて、駕籠を飛ばして参りました。

三吾 これはお鶴様。こんな遠く迄お越し下され、大事でも起きましたのか。

*お鶴が文箱を取り出し、三吾に渡す。

お鶴 ゆうべご家老様から、急ぎ岩永様に渡すよう頼まれました。この場でご披見下さいませ。

*三吾が手に取って見るが、段々青さめていく。お鶴が心配そうに見る。読み終わった三吾は暫く瞑目する。堪り兼ねてお鶴が、

お鶴 如何なされたのですか。今ご家老様の身の上にもしや。

三吾 お察しの通り、ご家老様は自ら命を断たれた。私たちが戻る頃には、もう彼岸に立つておられますよう。

お鶴 あのようにお優しいお殿様が、なぜ、なぜでございますか。そのお手紙にどのようなことが、差し支えなくば、お教え下さいませ。 「泣き崩れる」

三吾 ご家老様は、大殿様と幕閣に推された奇彬様との間に立って、苦しんでおられました。この度藩の貿易に関する秘事につき、その幕閣から査問を受けることとなり申した。よつて事が明らかになる前に、自らが責めを負つて、毒を仰がれたのでござります。

「合掌し、天を仰いで落涙する」

思えば、この前花見のときは、既に心に秘めておられたのやも知れませぬ。それでも最後まで、われらのことを案じて頂いたとは。お鶴様のことも触れてあり申す。亡き後は、共々工事奉行

の海老原様に、ご相談するようにとのことであります。 「手紙を渡す」

*お鶴が手紙を読んでいる時、橋の上に物音がして、三吾が上を見ると同時に、石が落ちて来る。曲者が逃げて行く。

三吾 危ない。 「お鶴を引き寄せ、抱き取る」

*石は脇を掠め地面に落ちる。

三吾 危ういところだった。

*お鶴は涙のまま三吾に縋る、暫く抱かれたまま。

お鶴 岩永様。

*三吾はお鶴を離す。頭領竜助や石工たちが駆けつける。

竜助 ご無事でございましたか。誰かがわざと石を落としたようで、怪しい奴がいま逃げて行き申した。それにしても、岩永様に恨みを持つ者など、いわんやお鶴様を狙う者など、この薩摩にはいない筈。不審なことじゃ。いずれにしても用心召されませ。

*お鶴は三吾を見詰め、名残り惜し気に、

お鶴 それでは取り込み事があります故、私はこれにて立ち帰ります。

三吾 道中気をつけて帰りやんせ。

お鶴 爺やが途中まで迎えに来ておりますので、大事^{だいじ}ございませぬ。駕籠も日頃頼^{たの}んでおります方ゆえ。

竜助 では配下の者を、途中で付き添わせましょう。

*お鶴に頭領竜助や石工たちが付き添って退場。

*三吾は暫く瞑目、弟の肥後石工頭領の三平が走って来る。片腕を血の滲んだ布で吊る。

三吾 どうした、うまく行ったか、怪我は大丈夫か。

三平 兄者^{あにじや}、急いで話す、追われとる。ようよ皆を脱出させた、もう藩境を越えたる。出立^{しゅつたつ}の時から、海老原様の配下に守って頂いたが、途中に出国させまいとする輩^{やから}が待ち伏せしとった。はては口論^{くげん}の拳句^{けんく}、侍同士切り合いになって、最後まで居^ゐって止めに入った儂^{わし}まで、怪我してしもうた。他の者はその隙に逃げたんじゃ。

三吾 藩の情勢はどうなつとる。

三平 藩論は二つに分かれとる。ご家老様一派と言われとるわれらを、肅正するといふより引き留めようとする人たちがおる。理由は城濠^{ぼり}や重要河川の橋などの有様が、外部に洩^もれるのを恐れちよるからじゃ。また楔石^{くわくせき}一つで橋の崩壊する絵図面の流出なども危惧しとる。

「辺りを見回し」

種山^{たねやま}石工は秘密を守ってきた。それを信ずるのは、今まで苦勞を共にした工事奉行の海老原様たちだけだいたい。それではこれで、藩境までもう一息じゃけん、もう行くばい。兄者も御身だけ

は大切に守られよ。

*足音がしてくる。

三吾 しっ、この橋の裏に隠れよ。

*藩士二人走って来る。三吾を見知らず、

追っ手 これ、いま誰かここを通って行かなかったか。

三吾 先刻川下の方へ走って行きましたぞな。 「指差す」

追っ手 よし、何としても引き留めねば。

*材木に躓き転び、慌てて走り退場。

三吾が三平に声を掛ける。

三吾 慌てふためいて、あちらへ行つたぞよ。今のうちに早う逃げ終せい。

三平 それでは兄者、種山で待つとるけん。

*三平は仮橋の下の木組を渡って退場。

入れ代わりに海老原配下の藩士が登場。

藩士 これは岩永先生、海老原の申し付けでお迎えに参上し申した。本日事件が出来し、今日のところは、大事をとってお引き揚げされたいとのこと。駕籠が用意してありますので、某がお付き添い申す。

第四場 お鶴の居宅

*夜お鶴が外から帰って来る。お鶴が部屋へ入り灯を入れた途端、土間に潜んだ間者が素早く戸を閉め、入り口に立ちはだかる。

間者 お鶴様、先日の件は思い直して頂きましたか。

お鶴 そこを退いて下され。思い直す余地はありません。

間者 この前工事現場で警告した筈、あの折はわざと狙いを外して、石を落としたのだ。

「声潜め」 噂によれば三吾は近々帰郷するそうな、だが家老の自決で藩の内部は混沌としており、密かに脱出せざるを得まい。彼は恐らく世話になったあなたへ別れの挨拶に来よう。そのとき出発の日時と道筋を、聞き出して呉ればいいのです。

お鶴 何度言われても無駄です。大体あの信義に厚い岩永様が、凶面など渡すことはありません。諦めた方が良いでしょう。

間者 そのときは、力にかけても奪うのが間者の役目、あなたの夫にも常々言い聞かされてきたこと。早く約束なされ。

お鶴 疫病神の様に執拗い方、早く消えなされ。私はどうなってもいいから、人を呼びますよ。間者 どうもおかしい。それほど庇うのは、三吾に心惹かれているのではないか。

お鶴 「狼狽気味に」 愚かなことを。

問者 いやそうだ。前の主の奥方ゆえ信用して、ここまで明かした。合力しりょうりきしてもらえぬなら、あなたの三吾への思慕を消せばいい。私と男と女の関係になつてもらおう。

*三吾が門口に登場。問者がお鶴に襲い掛かり、お鶴が抵抗する。

そこへ戸を叩き、三吾が入つて来て、問者の帯を掴み上げる。問者は一回転して立ち直り、匕首あいくちを出して構える。突つ込んで来る相手から三吾は身を交わし、手刀ではたき落とす。問者は逃げて行き退場。

三吾 また危ないところじゃった。只ならぬ気配なので勝手に入つて来たが、武家の父から授かつた術が、思わぬことで役に立つた。 「お鶴を助け起こす」

お鶴 三吾様。 「縫る」

*三吾はお鶴の背中を撫で、やがてお鶴から離れる。

三吾 水之口橋で襲われたのは儂だと思つていたが、どうもお鶴様らしい。只の暴漢とも思えぬが、今宵からどこか知り合いに身を寄せたがいい。

お鶴 恐ろしさに気も動転し、お礼も申し上げずご免下さりませ。仰せの通り致しまする。

*暫く両者黙り、向かい合う。

*やがて夜陰から唄声、三味線を手に頬被りした新内の流し一人。門口に立ち、頷き離れて行く。問者の変装。

「ア、もし引とむ袖を振り切つて行くをやらじとへだてられ 拗ねて見せてもどこやらに男心の解け易く好いた同士の差向ひ コレ此口で言ふたかと多くほを突いた 簪の抱き合せたる比翼紋 手に手を とつて引き添せてちつとアたる恋の海 離れがたなく見えにけり」

お鶴 この辺りを珍しう新内が流します。あれは蘭蝶、江戸を思い出します。でも聞き憶えのある声のような。

三吾 もう心配いりませぬ。 「やや間をおき」

お鶴様、いよいよお別れの時が来申した。長い間お世話を掛け、九年の月日が流れてしもうた。今はただ夢のごとある。

*お鶴は無言のまま、やがて堪え兼ねて泣き出す。

三吾 どげんなされた。調所様のことなど心労続きで無理も無か、気持が昂たかぶつておりなさる。

お鶴 三吾様、私も一緒に連れて行つて下さりませ。

三吾 ちと待ちなされませ、とても叶うことではない。

お鶴 何年もの間、ずっと私が慕い続けてきたか、どんなに心の内が苦しかったか。この前助けるためとはいえ、抱いて下されたのがどんなに嬉しかったか。

三吾 お鶴様、よく考えて下され。儂は薩摩でこそ士分で岩永の名字を許されているが、肥後へ戻れば只の石工。武家の奥方様と添い遂げられるものではないか。

お鶴 構いませぬ。私は江戸から親の言うなりに長崎へ嫁いで来ましたが、それは昔のこと。今は只の女でございます。

三吾 出来ぬ、私もお鶴様を憎からず思うておる。だが未練を残さぬが私の心意氣、と己に言い聞かせ。この苦しさをお鶴様にも分かつて欲しい。

お鶴 恥ずかしさを堪え、ここまで口説いたのに。三吾様。

*三吾が声を潜めて、

三吾 三日後、早朝に出立しようと思っております。地元の石工たちが、水之口橋まで送って呉れるので、薩摩で最後の渡り初めじや。ではお別れ申す。いま一度お顔を見せて下され。

お鶴 三吾様。

*三吾が戸を開けようとする。その時大きな音とともに家が揺れ物が落ちる。

三吾 噴火じや、桜島じや。

*お鶴が駆け寄り、三吾が抱き取り、そのまま倒れ込む。

第五場 水之口橋別離の場

*上手から中程まで水之口石橋、下手は一面の紅葉山。下手寄りに小さな観音堂あり、その前に座れる程の石。その裏手は草叢になつている。

前段 「捕り物の場」

*下手から男二人が、辺りを見回しながら登場。顔に鍋墨を塗り、荒縄で縛った破れ衣を纏う。

凶状持 兄貴のお陰で縄抜けして、無事ここまで逃げ果せた。この辺は荒らし回つたんで、よう見知つとる。やがて肥後との境になる、もう一安心よ。

連れ男 盗みで五人も殺した凶状持ちと一緒じや、道中ほんに気が抜けんわい。早うその川で顔を洗うて来んかい。

凶状持 それよか旅支度が用意してあるちゆう話だったが、どこにあるんか。こげん恰好じや村は通られんと。

連れ男 そこん観音さんの裏の草叢に、隠してあるぞよ。確かめて見んかい。

*凶状持ちが草叢に入り確める。戻って来て、いきなり隠し持った匕首で、連れの男に襲い掛かる。男は身を交わし、

連れ男 何をするんか。助けてやったのに。

凶状持 もう逃げらるる段取りが出来たんでよ、お前は邪魔じや。この世から消えてもらおう。

「更に追い掛ける」

連れ男 冗談じやなか、恩知らずめ。命あつての物種じや、逃ぐるにしかず。だけんどほんまは

丁度良かったど、馬鹿めが。 「逃げ乍ら退場」

凶状持 命冥加な奴め、追うとる暇は無か。早う着替えずんば。〔観音堂裏の草叢に入る〕

*やがて旅支度に着替えて出て来る。顔の鍋墨を落とすのは忘れている。

凶状持 さあてこれより気儘の旅に出ようかのう。〔道中笠をかざす〕

*藩士永村が捕り手たちを引き連れて、上手から登場。

永村 やあやあ、その鍋墨顔のお方、岩永殿とお見受けした。子細あつてお迎えに参上した。

神妙に薩摩へ戻らるるか、さもなくば討ち取つて呉れん。

凶状持 儂やそげんもんでなか、見逃して呉りや。

永村 鍋墨まで塗つて変装しとるのが、何よりの証拠、隠さずとも良か。

*永村と捕り手が追い回す。

凶状持 そうじゃ。もう一人仲間がおるんで、儂の事聞いて呉れや。今あっちへ行つたがの。

永村 おおその連れが、また大事なお人じゃ。ここは身共が引き受けた。お前たちは連れを捜し

て参れ、居らずばすぐ引き返して来い。〔捕り手たちへ指図する〕

*捕り手たちが下手へ消える。逃げ回る凶状持ちを永村が追い回し、小さな声で、

永村 おい、捕り手が戻つて来たら、儂や三吾じゃ、と言え。そしたら見逃してやる程に、草叢

の方へ逃ぐるんじゃ。

凶状持 ほんまかいの。命助けち呉りや、なんぼでも叫ぼうぞ。三吾じゃな。

*捕り手たちが戻つて来る。

捕り手 永村様、よう見ましたが姿は見当り申さん。

永村 そうか致し方なし。岩永殿、待たれい。

*凶状持ちが叫びながら、観音堂裏に逃げて行き、永村が後を追う姿が消える。

凶状持 儂は三吾じゃ、儂は三吾じゃ、儂は三吾じゃ、儂は三吾じゃ。

*一寸争う音がして、やがて永村が凶状持ちの首を提げて出て来る。

永村 帰参を勧めたれど聞いて頂けず、涙を呑うで討ち取つたり。観音堂の脇なれど、どうか成

仏されたし。

〔首をかざし〕 やい者共、今この首は何と言われた。

*捕り手たちは口を揃え、

捕り手 三吾と申されました。

永村 そうじゃ、三吾は岩永殿のお名前。皆の者この首は誰じゃ。言うのじゃ。

捕り手 「再び口を揃え」 岩永様にござります。

永村 そうじゃ、岩永殿じゃ。間違いのう岩永殿の御首級じゃ。それで良か。首をもうたら用

は無い。者共引き揚げるぞよ。それは持参した首桶に入れ、亡骸は運び出し片付けよ。

ようようひと仕事出来た。帰るとしようか。者共参ろうぞ。〔武張つて〕 やんれやんれ、

やんれやんれ。

*永村、捕り手たちが首桶を提げ、下手へ退場。

*暫く浴間。

後段 「別離の場」

*下手から、お鶴が旅支度で登場。

お鶴 ようよう水之口橋へ着きました。旅支度に手間取り駕籠でここまで来たが、早う来てしもうて。おやこんなところに観音様がおわします。お詣りしながら、三吾様を待ちましよう。

*お鶴が観音堂に手を合わせ祈る。間者が下手から登場。

間者 お鶴様。

*お鶴が吃驚して、身構える。

お鶴 またあなたですか、こんな処にまで現れて、蛇みたいに執念深い方。いい加減になさりませ。

間者 跡をつけて来れば三吾も捉えられる、案の定ここで落ち合う積りか。やはり私が推量していた通り、あなたは三吾を慕っていた。

お鶴 あなたには係わりのないこと、早う立ち去りませい。

間者 私は三吾を狙っている。あなたにその秘密を明かした、だから消えてもらわねばならぬ。だが私は間者としては恥ずべき心を抱いた。遣り取りしてる間に、あなたに惹かれていった。

お鶴 聞くだけで汚らわしい。私は三吾様一人のもの。

間者 私はお鶴様を三吾に渡しとうは無い。【お鶴に迫る】

*お鶴は懐から短筒を抜き、間者に発砲する。間者は倒れざま、手裏剣をお鶴に投げ胸に深く刺さる。お鶴は胸を押さえる。

間者 何でまた、短筒とは不覚だった。未練が残る。だが間者の掟に背いた罰だ、死の報い。われらは世に痕跡を残さぬもの。丁度良い、今日は雨上がりの急流だ。お鶴様お先に、さらば。

*間者はよろめきながら、橋の手前から川に身を投げ、姿は消える。

*お鶴は背中を丸め手裏剣を引き抜き、血止めの手当をするが、重傷の様子を見せ眩く。

お鶴 三吾様に早う会わずば。

*お鶴が胸を押さえて、観音堂の前の石に腰掛けて待つ中に、紗が懸かったように夢幻的になる。

*上手から、風車を持った旅姿の小娘が登場、橋を渡り観音堂へ差し掛かる。お鶴を見て膝に抱き付く。

小娘 かか様、ここにおらした、毎日捜しとった。【お鶴少し戸惑ぐ】

お鶴 かか様を捜してかい。おばさんはかか様じゃないけど、いま一寸だけならかか様になってあげよう。【優しく肩を撫でる。小娘顔を上げ】

小娘 いやじゃ、いやじゃ、ずつとかか様がおらんといやじゃ。やつぱりかか様を捜しに行く。

「下手へ行き、立ち止まる」

小娘 花嫁行列じや、花嫁行列じや。

*下手から、花嫁行列が静々と歩いて来る。お鶴の前を狐の嫁入りのように無言で通り過ぎ、橋を渡って行く。

小娘 あの花嫁御寮はかか様じや、あの花嫁御寮はおばさんじや、やつぱりおばさんがかか様じや。

*娘が走って戻り、お鶴に抱きつく。お鶴が抱き締める。行列は上手へ消えて行く。

*暗転し、すぐ明るくなる。お鶴の手から女の子は消え、傷付いた胸を抱いて茫然としている。その手には風車を持っている。

お鶴 夢か幻か、いつの間に風車をこの手に。いつまで生きられましようか。

*下手から、三吾が頭領竜助を先頭に、薩摩石工たちに守られて登場。

三吾 お陰で無事ここまで辿りついた。あの山を越えればわが肥後の国、名残り惜しうござる。

竜助 おおあそこにお鶴様が待つておられる。心配しとったがちゃんと旅支度して、紅葉の橋を守られる龍田姫様のようじや。 「お鶴に近寄り」 (秋を司る女神一)

竜助 お鶴様、待ち兼ねておられたでしょうに、岩永様が参られましたぞ。

*お鶴はようやく立ち上がり、

お鶴 申し訳ございませぬ。少し疲れてしもうて夢を見ておりました。可愛い女の子と婚礼行列の夢でした。観音様に見せて戴いたのでしょうか、お供えの風車まで。

三吾 ともかくも良かった。用意が調うたら出発せずばなるまい。

お鶴 これから二人水入らず、嬉しうございます。末長う宜しうお願い申し上げます。

「言い終わり、胸を押さえる」

三吾 どうなされた。急いで来られたので差し込みでも起こされたか。少し休まいでも良いか。

お鶴 三吾様、急いで行かねば、思わぬ邪魔が入らないとも限りませぬ。

*お鶴が少しよろけ、三吾が支える。竜助が心配気に、

竜助 本当に大丈夫であらせますか。

*藩士永村が急ぎ戻って来る。息急き切り、

永村 やあやあ間に合うたか、岩永先生安心召されい。代りに別の岩永殿の首を先程刎ね申した。

そいつは名立たる凶状持ちで近々獄門首になる決り、年恰好も似とるで丁度良かったど。

藩の連中もおよその辺りの事情は察しがついとるが、黙つとる筈でござす。なあに薩摩を狙うとる奴輩に、岩永先生はもうこの世には居られん、そう思い込ませとけばええのじや。

海老原様もこの話を聞いて、いこう喜こうでおられた。立場とお見送りは叶わぬが、呉々も宜しくとのことござった。大恩ある先生に義に悖るような振舞いは、薩摩隼人は出来申はん。

三吾 重ね重ねご迷惑をお掛けし、申し訳ござらん。

永村 何の何の永年にわたるご功績には、こればかりのこと。 「お鶴に気付き」

お鶴 何のお鶴様、お慶び申し上げます。 お似合いの夫婦めおとにあられる。 それ皆の者もお祝いを申し上げます。

一同 「声を揃え」 お目出度うござります。

三吾 有り難うござります。 いつまでも皆様にお手間を取らせてもいけません。 いずれ世の中が落ち着けば、またお会いする日も訪れましょう。 お鶴殿、名残りは尽きぬが参るとしようか。 差し込みは落ち着き申したか。

お鶴 あい。 「立とうとするが立てず」

永村 これはいかに、このような時に血の匂いがする。 お鶴様如何されたのじや。

お鶴 「胸を押さえて」 大したことはありません。 少し傷を負うただけでございます。

「胸から手を離す、出血している」

三吾 あつこれは、大分深いようじや。 誰に負わされた。

お鶴 実は幕府の間者に刺されました。 作り話で私を脅かし、薩摩の秘密を探らんと、三吾様を狙っております。 その上私に横恋慕よこれんぼ、襲われた程に防ぎました時。

永村 その話は儂も海老原様から聞いたとつた。 お鶴様を守るように言われ、密かに見張っております。 今日先程の大事だいじあり、目を離れた隙にやられたか、口惜くちおしや。 して間者はいづくに消え申したか。

お鶴 長崎から来た時、密かに持ち出した護身用の短筒で、止むを得ず射ちました。 その者は間者ゆえ、恥じて川に飛び込んで死にました。 このような大事の折に、ご迷惑を掛けてしもうて、申し訳ございませぬ。

三吾 如何致したもののか。 しっかり養生した方が良さそうじや、私も薩摩に残ろう。

お鶴 それはいけません。 今日永村様が折角手を尽くされたのに、もう引き返すことはいけません。 傷は深うございます。 苦しい、もう助からぬものと存じます。

「胸を押さえる」 私はずっと三吾様をお慕い申し上げます。 この気持を分かって下さり夫婦の約束まで、お鶴は幸せでした。 先程お待ちしている時、観音様に、私の婚礼の列とまだ見ぬ愛しいわが子まで、見せて頂きました。 ほれこの風車。

「一息つき」 三吾様、この世のお別れでございます。 皆様お世話になりました。 せめてこの橋を、皆様が精魂込めて造られたこの橋を、三吾様との最後の道行みちゆきにしようございます。 三吾様抱いて下され。

*お鶴が最後の力を振り絞り、三吾に支えられ立ち上がる。

お鶴 皆様お願いにござります。 お鶴が息絶えましたら、観音様の前にお詣りさせて頂き、その横に埋めて下さりませ。 そして墓の代りに、幻のわが子の持っていたこの風車を挿して下さい。

三吾様の最後の石橋の畔ほとりに、眠りとうござります。 だが体はここに残っても、魂はどこまでも

お供して参ります。

一同 お鶴様、お鶴様。

お鶴 それでは三吾様、これより参りましょうぞ。

三吾 水清き、わが肥後の地へ二人で道行しようぞ。

*二人は橋を渡って行く。

永村 「惜別の情を込め謡う」

肥後の国 影白川の水汲めば 影白川の水汲めば 月も袂や濡らすらん それ籠鳥は雲を恋

ひ 帰雁は友を忍ぶ 人間もまたこれ同じ：」 「檜垣」

*橋の半ばに来て、お鶴ががっくり頭を垂れ、事切れる。

三吾 お鶴殿、 「抱いたまま宙を見据え、暫く立ち尽くす」

*やがて三吾が咽ぶ、皆が号泣する。暗転、すぐ戻る。

*観音堂の中に、お鶴の遺体が置かれる。前に線香と香華が手向けられ、外に風車が挿され、カラカラと回っている。髪を下ろした三吾が拝む。やがて立ち上がり、

三吾 皆様有り難うござりました。これでお鶴殿も成仏致したことであります。思えばめおととしては短い縁でござりましたが、私も現世を離れ菩提を弔い申す。

これよりお鶴殿の遺髪を胸に抱き、その魂を連れて肥後の国へ帰らんと存じます。永村様、海老原様にも、この今日の日のことをとくとお伝え下さりませ。

永村 畏まった。良くお伝え申す。

三吾 竜助殿、皆の方、これより益々励み、薩摩の地を豊かにされるようお祈り申す。

竜助 きつと先生のご期待に沿うでありますよう。

一同 沿うでありますよう。

*三吾は笠を手に持ち、頭を下げて橋を渡って行くが、中程で立ち止まり、懐に手を入れ絵図面を取り出す。

三吾 皆様様方、薩摩の皆様、これが最後の岩永三吾の別れの餞にてござります。これにて薩摩の国の秘めごとは消え申した。

*絵図面を破り、橋から紙片を撒く。

三吾 それではお鶴殿、参ろうぞ。

今を始の旅衣 今を始の旅衣 日も行末ぞ久しき そもそもこれは九州肥後の国阿蘇の宮の神主友成とは我が事なり： うたての仰せ候や 山川万里を隔つれども 互いに通ふ心遣の妹脊の道は遠からず： 高砂や この浦船に帆を上げて この浦船に帆をあげて：」

〔高砂〕

*謡いながら振り返らず、上手へ消えてゆく。皆見送る。

へ幕下りる

石橋の伝説

本編

大川心中物語

登場人物 (二幕九場) 秋から春へ

新子 東京下町の娼婦

蘭子 岡野家の養女

国夫 紅家一家の客分 他国の籍を持ちその反政府結社の一員

浩平 小芝居一座の座長 本名岡野浩介

易者 政治結社の監視役

金太 花売り娘に扮する 国夫と同国籍

藍子 蘭子の養母 元男爵未亡人

バヤン 石材技術習得の外国人

紅家一家の組員三人 国夫の母国の体制派

金髪と黒髪の外国人娼婦

その他

経済研究所の部長(顔と声) 密航者 警官二人

第一幕

第一場 盛り場にある公園

*東京下町の歓楽街の裏手、道の街路樹、公園にベンチ。遠くにネオン瞬く、公園の正面に怪しげなホテルの入口。時代は昭和五十年代初めの九月深夜。

街路に易者が机を出し、街娼の新子が立つ、国夫が登場。

国夫 「戯けた風に」 もうし新子さんエ、イヤサ新子、久し振りだなア。

新子 「振り返る」 そういってお前は、

国夫 国夫だ。

新子 「驚いた振り」 えッ、

国夫 おぬシアおれを見忘れたか。

新子 「さばさばして」 ここで芝居はお終い。いくら秋の夜長たって、あたしや忙しいんだ。

国夫 「指差して」 久し振り序でに教えてやろう。今夜あたり手入れがあるかも知れねえ、早く

店じまいをするこつだ。数を重ねりや目つけられるぜ。

新子 お生憎さま、まだ一遍も挙げられたことが無いんだ。だが折角いなせな兄いから親身のご忠告だ、精々用心致しやしよう。〔両手合わせて拝む〕

国夫 いなせな兄いとは、俺のことかい。いくら俺が深川育ちと言つても、お前も世辞が巧くなつたもんだぜ。ところでこちらに、石工の見習いで来ているバヤンという職人が、お前にぞつこならしいな。しきりに捜してたらしいぜ。

新子 あたいは、一人の男に入れ込まないのさ。〔ステップ踏み乍ら〕色んな男とねんねして、その故郷の夢を一緒に見るのさ。

易者 バヤンと言えば、最近お前さんは、日本人や西洋人は余り相手にしなくなつた、と聞いているが、本当かね。最近は近くの国から、結構こちらに来てはいるようではあるが。

新子 「手を振つて」 あたいは日本人や西洋人は、元々好きでないのさ。シャボンの匂いをぶんぶんさせて、人間らしくないんだ。とくに都会人という人種に、胡散臭いが多い。週刊誌の吊り広告に、踊らされているような奴に限つて、都会人の良識なんてうそぶく。

娼婦にだつて、お相手致すには、好き嫌があるんだよ。

国夫 「腕を組み」 そうさね、娼婦は世界最古の職業の一つだ。男との合意に基づき、対価を貰つて性を提供する。合法非合法は別にしても、人間の知恵の生んだ市場経済の一つだ。

職業と言うからには、相手を選ぶ権利もある。

新子 理屈っぽいのも、粋な男の条件なかねえ。まあ二人とも世間様から見れば、あんまり褒められた職業でもあるまいが、本音で都会に生きている正直者と思いたいよ。

ところであんた前に、面白い盛り場に居たそうじゃないか。どんな風だったのかい。聞かしておくれよ。

国夫 そうさなあ、調子良く言えば、まあこんなところだぜ。一九七五年、酒場バロックにいた頃のことよ。

” 泥酔の眼に天は乱れて映る

電車の廢線に残るへど 切々と物哀しく

色道修行の若衆連 ピーポツポツ唄い歩く

うつろう四季は芥にひそみ

とおりやんせ ここはどここの細道じゃ

はて無月なる面妖の空

名月の宴は、いつの日にてありしか

ひとつとせ、ひとり娘とやるときにや

今宵一夜の色小町

紅殻格子に花飾り 来し方の幻よ
窓辺によりて女たちは合唱する
天の岩戸は ペンキの剥げた酒場の扉
外には赤い顔の八百萬の神々
うずめのような女が客を呼んでいる

ぐいとひと飲み 狂言作者はおらずとも

おべっかにベタ惚れに空威張り

歌舞伎座が来なかつた町を慰める

酒場バロック トタン屋根に雨の音

ひよいと頭に手をやれば

手垢のついたシャツポがあつた

縋縋の旗のようにこれを振り振り凱旋だ

“さても一座の皆様へ、下手の長読み飽きがくる、まずはこれにて段の切り”

*新子と易者が拍手する。

易者 こりや唄じやな、お前さんが伝法な啖呵を切るんなら分かるが、唄とはね。それでも秋には雀が蛤になる。言い伝えがある。市井の徒が唄詠みになつても、珍しくないかも知れない。

新子 ふうん、まるで大福餅とフランスパンをつき混ぜたような、変わった台詞だよ。まあ盛り場の兄いには、ぴったしかいな。

易者 面白い歌じや。だが水を掛けるようだが、この諧謔めいた気分の裏には、自己嫌悪が潜んでいる。お前の生き方には用心するこつた。

国夫 あれも一生これも一生、こいつは宗旨を変えにやらねえ、有り難うよ。

新子 それにしても、非生産的な戯れ唄だな。まあいいか、あたいのような働いた後のお楽しみも、必要だからな。一人よがり、訳の分からぬところもあるが、ここをパリの下町と気取つて聞いてあげよ。

国夫 お前、パリに行ったことあるんか。

新子 仕事でね。 「慌てて言直す」 いや、遊びに、一寸だけさ。

国夫 「首を傾げ」 お前は初めに仕事と言つたろう。どつか曰くあり気な女だぜ、まともに育つて、どこかでぐれちまつたのか。まあいい、こんな処で素姓を問うのは、野暮の骨頂だ。

新子 あたいは、生まれ乍らの町の女さ。

易者 新子さん、パリに遊びに行つたと。商売の仕方でも研究してきたのかい。

新子 「スカートを摘んで踊る」 パリでも、黒の長靴下にガードルを付けている奴もいるし、どこでも娼婦は同じさ。昔西洋のある国では、偉い坊さんの帽子を、その種の宿の絵看板にしていたそうさ。 「易者帽子に手をやり」

易者 さすが信仰厚い国、と感心することは無いよな。そりや男のあそこを、おっ立てた形じゃないか。中にはペチャンコの男も居るだろうがな。拙者の帽子みたいなもんじゃ。

新子 「手で形を作り」 ちゃんと膨らんだ帽子に仕立てるのが、あたいらの役目。坊さんに劣らぬ功徳を、積まねばならんのだ。日本は芸や色気を売るのは、世界に冠たる先進国。平安時代の白拍子から江戸の花魁まで、名立たる遊興国だ。

だけどこちとらはもつと進んでる。夜ごとに変る枕の数、体だけで極楽に行かせてあげる、本職なんだ。

易者 「背伸びをして」 誇り高き新子さん。今日はそろそろ店仕舞いするで、あんたの運勢を見て上げようか。

新子 「手を振り」 真つ平さ、あたいの手の平なんて、のっぺらぼうさ。第一手相なんて、毎日変わるそうじゃないか。

国夫 違いねえ、俺の生命線なぞ、いつも切れたり付いたり。地獄のフライパンの上で、スキップしてるようなもんだぜ。 〃やくぎな渡世の古沼へ、足も脛まで突っ込んで、洗って落ちねえ臭味がついた” 「おどけて見得を切る」 おっとこれは、 瞼の母の台詞だ。

新子 そうそう、「石を積む仕草」 ここは賽の河原みたいなものさ。現世に戻れぬあたいのために、今日のあたいを一つ積み、明日のあたいを二つ積み。回向の塔を積んでいるのさ。

国夫 ここは冥土の賽の河原か、それにしちや生臭い冥土だぜ。 「鼻を摘む」

だけんど功徳を積めば、石は塔になり橋に化けて、現世に帰れるぜ。易者さんは物知りだ、何と言ったっけ、あの話は。

易者 「扇子で卓叩き」 地蔵和讃、ちよいと語りましょう。

” これはこの世のことならず、死出の山路の裾野なる、賽の河原の物語、聞くにつけても哀れなり。二つや三つ四つ五つ、十にも足らぬ幼な子が、賽の河原に集りて、父上恋し、母恋し。峰の嵐の音すれば、父かと思ひよしのぼり、谷の流れをきくときは、母かと思ひはせ下り、手足は血潮に染みながら、河原の石をとり集め、これにて回向の塔を積む。

一重積んでは父のため、二重積んでは母のため、兄弟わが身と回向して、昼はひとりで遊べども、日も入り相いのそのところに、地獄の鬼が現れて、積みたる塔を押し崩す”

国夫 「地面を蹴り」 泣かせるぜ。でも最後はお地蔵さんが、助けて呉れるんじゃないか。俺なんぞいつも、三途の河原の手前で、うろろうしてるぜ。人生の天秤に乗って飛び跳ね、毎日命が軽くなったり重くなったり。

まあ神様や仏様から見れば、ちんけな俺の生き方なんぞ、滑稽で仕様がねえだろうが。

易者 「国夫の顔を指し」 神様仏様と来たぜ。あんたの顔にはそぐわないのう。

国夫 だけんどよう。神様や仏様とご対面するより、世の中間同士、角突き合わせて暮らす方が、面白じゃないか。お互いが巧くゆくよう工夫するのが、人間の知恵だろう。

易者 でもな神仏が居ないと、人間相對の關係だけでは、墮落し兼ねない。だが信仰薄い世の中でも、救いはある。今日は良夜だ、こんな歌がある。お前たちも学校で習っただろう。

「月みればちぢにもこの悲しけれ わが身一つの秋にはあらねど」秋の清らかな月はこの歌人だけでなく、一人一人の心に宿ると歌っている。こんな氣持を皆が持てば、人間らしい氣持は、つなぎ留められるのじゃ。

国夫 俗塵の風に吹かれつ放しの俺には、耳の痛いことだぜ。

新子 何だか難しい話になったけど。とに角今の世の中は、安逸に流れているよね。もう少し真剣に考えなくちゃ。この国が豊かになったのも、みんなが汗水垂らして働いたからだよ。どうして国夫のように、遊び好きの太平樂な連中が出て来るんだろうね。

*国夫と易者が笑い出す。

易者 「遊びをせんとや生まれけむ 戯れせんとや生まれけむ」平安時代の遊女の唄今様の一節じゃ。遊びは人間の業、四角四面の世の中の潤滑油じゃ。

いつの世も小金が溜れば、辛いときは忘れて、面白おかしく遊ぶ。近くは江戸の元禄、十九世紀末のパリ、そんな土壌から芸術の花が開く、そして皆を愉しませるのよ。豊かになっても、美しいものがないと、只の金満だ、泡と消える。

新子 じゃあたかも、この町に咲く徒花か、「この世に咲く花数々あれど、徒花に実は成らぬ」まあいい、咲かぬ花よりまだましさ。さあて秋の夜の長談義も、これにてお開き。時刻もやがて丑満刻、折角のご親切な教えを無にすまい。

「芝居掛かって」 兄いに易者に辻の君、ハテ面白き別れじやのう。

三人 「皆で」 ハテ面白き別れじやのう。

*蟬が公園の木立から飛び立つ。皆シーンとなり、夜空を見上げる。

易者 蟬の夜立ちだ。今年も最後の秋蟬だ。七年も土の中において、やっと星空の彼方に旅立つことが出来た。

第二場 経済研究所オフィス

*机上のディスプレイの画面を前に、背中を見せてビジネススーツの蘭子。上手にもう一人の背中を向けた蘭子の影、つまり新子あり。

蘭子と新子のみ浮かび出て、全体は暗。机上にはコスモスを活けたガラス花瓶。

影 デイスプレイの野郎、何でそんなにピカピカするんだよ。もうやってられねえよ。あのおやじ、パソコンに名前など付けやがって。何がパソコンちゃんだ。成長率5%確実ですか、在庫調整は進んでますか、設備投資の見込みはどうなっていますか。ふん何言ってるんだ。

*下手に、でっぷり油切った部長の顔だけ浮かび出て、不気味に口が動く。

部長 蘭子さん、僕はこれで失礼しますよ。あまり遅くならないようにして下さいね。言うまでもないけど、あなたは当研究所にとつては、大きな戦力なのです、期待してますよ。

*机の前の蘭子が頷く。

影 糞食らえ、猫撫で声出しやがって。あれでも若い時は、切れ者の調査マンだったのに、最近は大鼓腹になってしまった。それに比べりゃ、この前の部長は海軍兵学校で叩き込まれただけあって、男の美学があつたぜ。何と言っても生きる哲学があつた。あの人は月とスッポンだ。

ところで、どうも最近あたいのこと、怪しんでいるようだ。妙に気のある素振りをしやがる。善人面したおっさんよ。お馬さんにして跨またがつたるか。ひいひい泣かせてみたいもんだぜ。

部長 ああそう言えば、やがてお父上の一周忌ですね。あなたのお父上は偉かつた。明治の勤皇の志士の血を引くためか、会社でも常に国益を、念頭において行動された。

私利私欲のない無心の方で、並の経営者ではなかつた。戦争の痛手を克服し、早く欧米と肩を並べねばならぬ、と経済の復興に力を尽くされた。業界不況と病魔には勝てず、不幸なことになったが、私は心から尊敬してますよ。

ああこれはまたあなたに、色々思い出させてしまった。今度こそ本当に失礼しますよ。

「部長の顔が消える」

影 何だよ、今更下らないオベンチャラ並べて。父が苦しい頃、そんな話は聞いたことがない。戦後ドサクサ教育の申し子みたいなご仁ごじんだ。経済の事しか分からぬ世の中音痴め。福助さんを神棚に祀って、経済成長のお祈りでもしてりゃいいんだ。

それにしても、気色きしきの悪い歳の取り方じゃねえか。戦後間もなく、商品担いで世界中を歩き回った、父たちの苦労が分かつて堪たるか。

*机の前で蘭子が背伸びする。

影 さて今頃野山は錦、あたいは盛り場の竜田姫たつたひめ、有料の紅葉狩りとござい。とは言っても大して御銭おあしなど欲しくもないが、邪魔になるわけでもない。風流代わりに、あの野郎共にこの身を抱かせ、気宇壮大にユーラシア大陸の夢でも見るか。

一句、コスモスや道の辻つじ君きみ夕ゆふまぐれ。 「口遊くちみ、花卉けいを千切ちぎって宙そらに撒まく」

第三場 岡野家の別荘

*大正時代の重厚な造りと調度を備えた洋間、正面に豊かな髭を蓄えた大礼服の人物肖像画。暖炉の前の椅子に、蘭子とその養母の藍子。暖炉の火が燃え、脇に残り少ない薪が積まれている。

藍子 「薪をくべ乍ら」 この別荘も差し押えられている。残った薪もこれだけ、ここに来られるのも少しの間よ。岡野家の体面も、もう繕えなくなったわ。

これからは、あなたがしつかりして呉れなきゃ。だけど肝心のあなたが、一応お勤めはきちんとしているらしいけど、時々居なくなるのね。とくに夜はどこへ出掛けているの。

*卓の電話が鳴り、藍子が立上り受話器をとる。

藍子 はい岡野でございます。 「暫く聞く」 ああその件でしたら、私共では何とも申し上げられません、すべて芝原先生にお任せしてございますので、そちらの方で伺って下さいませ。

「また聞く」 左様でございます。申し訳ございませんが、どうぞ宜しくお願い申し上げます。それでは失礼致します。

藍子 「椅子に戻り」 また債権者からよ。こんなところまで電話して来るなんて、困ったものだよ。早く整理が付いて呉ればいいんだけど。

先刻の話だけど、あなたはちゃんとした身持ちでないかと困るわよ。世間的には婚期から外れた三十過ぎになったけど、まだまだ相手が見つかる年頃だよ。戦前の岡野男爵家をご存じの方は、まだ結構いらっしゃるのよ。

蘭子 またお母様の繰り言が始まったのね。この別荘だって、私たちには身分不相応なのよ。戦前からのお家だから、毎年の維持費だって相当な額よ。これが売り立てられても、借金清算の足しになれば良しとしなくちゃ。昔の事は考えないことよ。

こんな肖像画もう外しましょ。こういうのを見ていると、また色々思い出すでしょ。

*蘭子が椅子の上って、肖像画を外す。

蘭子 おお凄いな埃だわ。大正時代から掛けられていたんですものね。ひいおじいちゃま、お疲れ様でした。これからお家の納戸で、ゆっくり休ませてあげますからね。

どだい貴族の華族のと、お母様は仰有るけど、おじいちゃまたちには悪いけど、たかが男爵じゃないの。千年以上の家系を持った、お公家様やお殿様の大名とは違うのよ。明治維新の時に、お国のため命を賭けて働き、それなりの功績を認められて昇進した。

だけど元はと言えば、九州の貧乏士族じゃないの。理想のためとはいえ、白刃の下を潜ってきた、荒々しい下級武士の家系なのよ。それは僅か三代前のことなのよ。

藍子 でもあなたが家に来てくれたのは、そのお陰よ。岡野家の八郎曾祖父とあなたの曾祖父十郎様は兄弟で、二人とも新政府に仕えられた。やがて十郎様は役所を辞して、明治十年西南戦争で薩摩軍に身を投じ、西郷先生に殉じた。

十郎家は九州に引き上げて、その家にあなたが生まれて、そしてこの家にあなたが来て呉れた。両家とも親戚付き合いをしていて、良かったのよね。

*また電話が鳴る。

藍子 またさつきみたいな電話かしら、今度はあなたが出て頂戴。〔蘭子が受話器をとる〕

蘭子 岡野でございます。あつ先生、いつも大変お世話になっております。母はここにおりますので、いま替わります。少々お待ち下さいませ。お母様、芝原弁護士さんからよ。

藍子 もしもし藍子でございます。いつも無理なお願いばかりで、申し訳ございません。

「暫く聞く」 ええ喜んでお受けします、本当に良うございました。債権者の方にも、ご迷惑をお掛けしますが、何分宜しくお願い申し上げます。

「また聞く」 いえいえ致し方ございません。私と蘭子が世間様並みに暮らして行ければ、それだけでも、有り難いことでございます。わざわざこんな時間にお知らせ頂き、忝く存じます。ではまた改めまして。〔椅子に戻る〕

藍子 会社の整理が、大体目鼻が付いたそうよ。良かったわ。何とか今の住居と、暮らしてゆけるだけの見通しはつきそうよ。ほっとしたわ。

蘭子の幼かった頃を思い出すわ。終戦後まもなく、お母様を亡くしたあなたを養女に迎えた。この家に連れて来たときは、五歳だった。愛らしかったよ、まるで京人形のようなだった。

お父様はあなたを、目に入れても痛くないように可愛がったわ。私だって同じ、三年前に亡くした子の、生まれ変わりのような気がして、一生懸命に育て上げたわ。

蘭子 私もことさら養女などと、意識したことも無いし、お父様お母様を心から愛してきたわ。期待通り、小さい時から良い子だった。大学で学び更に留学もして、今の経済研究所にスカウトされた。毎日グラフや統計を眺めて十年、それなりに認められて、役付まで昇進もしたんだわ。

藍子 お父様がお元気の頃は、まだ良かった。岡野家のこの百年は、一体何だったのだろう、と考えることもあるわ。戦前の男爵家の五十年、そして戦争に負けて、爵位も財産も失くなってしまった。

それでもお父様が、大商社の役員を勤め上げて、一応体面を繕うだけの生き方はしてきたわ。その後お父様が事業を興され、滑り出しは順調だったのに、間もなく病で倒れられた。亡くなられたときの負債は、漸く整理のめどは付いたけど、失ったものも大きかった。

蘭子 また元に戻るのよ。明治以前の貧乏士族に還るのよ。精霊流しの灯籠のように、川から大海に押し流されて行くのよ。でも私は敗戦の日、二重橋の前で自ら命を断った、その人の血を受けているのよ。

藍子 何を言うの。

蘭子 知っているの。亡くなる前お父様から、教えて頂いたの。

*暫く沈黙。藍子が立ち上がり、蘭子に背中を見せ乍ら、

藍子 あなた知っていたのね、こればかりは、教えたくなかったんだけど。実のお父様は陸軍軍人として戦死した、そう信じていると思っていたのに。

蘭子 「続けて」 年子の弟が居たのも、うっすら覚えているわ。でも養家から出奔し、劇団に

入ったと聞いたわ。前からお母様に確かな名前を聞こうかな、と思っていたんだけど。

藍子 私も居なくなったら、何も分からなくなるし、そこまで知っているのなら仕方ない。たしか、浩介とか言っていたと思うけど。それよりか前の話に戻るけど、夜どこへ出掛けているの。時々、あなたという人が、分からなくなるのよ。母親として、子供を見失いたくないの。

蘭子 お家に居る時は、幼い頃の蘭子でいいの。別の蘭子は知らないで良いのよ。私は水のように生きられない、だからどこかに体を縛り付けておかねば。自分の体の有りようを確かめなければ、生きていけないのよ。

藍子 言う意味は良く分からないけど、とにかく不安なの。なぜかあなたが、どこか知らないところへ消えてしまいうそで。どこへも行かないで、たった一人の肉親なんだから、私を置いて行かないで。

第四場 盛り場にある公園

*十一月の黄昏時、新子が立つ。逃げてきた密航者へ声を掛ける。

新子 あんた何処の国の人、遊ばないか。そろそろ冬枯れだ、安くしとくよ。

*密航者が頷き、二人はホテルへ。やがて新子がプンプンして出て来る。後を密航者が追い掛ける。

新子 全くしゃあない。せっかく安くして上げようと言ったのに、何か物を人に渡して呉れと。

あたいは、あんたに抱かれるために、ホテルに入ったのにさ。

密航者 「片言で」 お願いです、お金は払います。お姐さんおえは私たちのような外国人に、凄く

親切な方と聞いています。私は密航者で、官憲に追われています。逃げられない、もう捕まる。

この大事な物を、ある人に渡して下さい。

新子 一体誰に渡すのさ、あたいは、あんたたちに付き合いが深い。仕様がな、聞いてあげようじゃないか。あたいはお上かみが嫌いさ。

密航者 これは秘密にして下さい。

新子 あいよ、あたいは口が堅い。誰にも言わないさ。

密航者 「口早に」 その人はここら辺りにいる筈です。国夫と名乗っています。

新子 おおあのへっぼこ唄の兄いか。何をあんな奴に渡すのかい。

密航者 これがその大事なものです。渡せば分かります。 「封筒を新子に渡す」

*警官が二人登場。

警官 おおここに居たぞ。

*密航者が逃げてゆき、警官が追い掛けそのまま退場。

花売り娘に扮した男の金太が、花籠を抱えて歌い乍ら登場。極彩色の服にスカート、髪は金髪に染めカ

リフラワー形。

金太 「青い芽を吹く柳の辻に 花を召しませ 召しませ花を」 あら新子姐さん、ご機嫌よう。いつも、沢山お花買って頂いて有難う。

新子 金太、いつもながらいい声ね。それにあなたの花を買えば、花詞はなとじばも添えて、贈って呉れるしね。

金太 「花を取り出す」 今日はずんと奮発して寒牡丹、蕾は小さいけど、冬牡丹の前に咲く花よ。

牡丹の花は中国では、百花ひゃっかの王。日本ではぐつと粹いさになって、立てば芍薬しやくやく、座れば牡丹。

西洋の花言葉では、頬を仄かに染めた恥じらい。でもみんな月並みでしょう。

「嬉しげに」そこで金太が有名な俳人の作品から「よろこびはかなしみに似し冬牡丹」という名句を見つけました。どう哲学的で深遠な句でしょう。

*着物姿の浩平が、紅屋一家の組員三人に囲まれて登場。金太を押し退け、

組員甲 邪魔だ、邪魔だ、金太ときやがれ。「浩平に向かい」

てめえ、ここで興行打つんだったら、挨拶の仕方が あるんじゃねえか。知らん顔で胡麻化そうとは、ふてえ野郎だ。ちゃんと切餅きりもち包んで、お願いしますというのが、筋じゃねえか。

昔からの土地のしきたりを知らねえ、とは言わせねえぜ。

浩平 あんたたち、無いものは無い。今度の芝居を打つのは私の念願だった。借金をして、ここまで漕こぎつけたんだ。かってあんたたちが、地元の興行に係わってきたのは知っている。

だが今の時代、何で金まで払わなきゃならないんだ。地回りじまわりに用心棒してもらおう要もないし、第一、思惑おもわく通りにならないと妨害するのは、あんたたちじゃないか。

組員乙 くどくど言うんじゃねえ、これは日本の文化なんだ。土地の者と親しくするには、当然

お銭あしがいるんだよ。芝居者ものが、それ位分からねえのか。

組員丙 問答無用、こいつは空からつ穴けつだぜ。挨拶料が当初予算に含まれていないなんぞ、可笑おかしな野郎だぜ。腹いせにぶつ叩いて、足腰立たねえようにしてやろうぜ。

新子 何よあんたたち、ここで聞いてりや、日本文化だの当初予算など気色の悪い。

組員甲 姐ちゃん、教えてやろう。これは「組の発展と展望」という題で、偉えいえ評論家のせんせえに講義を受けて、教わったのさ。そこらの新興の組と違って、俺たちは伝統ある紅屋べにや一家の身内だぜ。義理人情の思想的背景が、人の情けも地に落ちたこの日本に必要となる。

それにはコストが掛かるのよ。

*酉の市の熊手を担ぎ国夫が登場、皆は気が付かない。

新子 ああもう受け売りはいい。それでこの人をどうしようと言うんだい。

組員乙 知れたことよ、小屋主ぬしに掛け合って、立て替えさせるか、こいつを痛め付けて、芝居が出来ねえようにしてやらあね。

浩平 小屋主さんに咎とがはない。私が良く確認すれば良かったんだが、いま小屋も不入り続きた、

裏向きの事まで教える余裕がなかったか、あるいは私が知っていたと思っておられたんでしよう。

組員丙 つべこべ言うんじゃないか。要は大胆な決断と実行だ、優柔不断が人間を駄目にする。要は払うか払わないかだ。

組員甲 武士は食わねど高楊枝たかようじ、という訳には行かぬ。格式ある組としては、体面を保つため、それだけの必要経費が掛かるんだ。

新子 何言ってるんだい。昔の武士は食うために、傘張りや提灯張りまでして、手を汚さず暮らしていたじゃないか。何だのお前たちは、色々御託ごたくを並べ、糞の役にも立たない用心棒代まで、吹っ掛けやがって。仲間内や金持の旦那を捉まえて、賭場とばでも張つてりゃいいんだ。

それは早耳のお前たちだったら、暗いことをしなくとも、不動産やら金貸しやら、割に合う仕事は、幾らでもあるじゃないか。ちったあ頭を働かせたらどうだい。

金太 そうだそうだ。

組員乙 なにい。「金太を睨む」

*金太が慌てて、花の包みを新子に渡す、お釣りは要らない素振りなので、お札だけ受け取り逃げて行く。

組員丙 言わせておきや、横からしゃしゃり出て、生なまなことほざくんじゃねえよ。今は組も鉄火場てつかばだけじゃねえ。時には堅気の連中は怯ひるむようなまともな仕事まで、俺たちは引き受けてやつてる。

但し景気という奴は浮気者だ、こいつにはいつ見放されるか分からぬ。そんなときに備えてよ、収益源の多様化を図るのは、組員の務めだ。皆で知恵を絞るのは当たり前だ。

浩平 尤もらしい科白せりふで、汚ねえ仕事の口漱すすぎとは、聞いて呆れるぜ。ねえものはねえんだ。

この体を張つても、今度の芝居は上演する。叩きのめされたら、這つぐい蹲はつてもやるぜ。

組員甲 何をこの野郎。「身構える」

新子 偉くお前さん、気張ってるようだね、一体どんな芝居を上演するんだい。

*国夫が声を掛ける。

国夫 おうお前たち、このお方をこれからどうしようと言うんだ。

組員乙 おおこれは花組のチーフ、兄貴も見回りですかい。なあにわつちらのしまで、こいつが正月興行打つんで、挨拶がねえと、絞め上げているところぞんすよ。

国夫 「浩平に」 兄さん、さつきから聞いてりや、空つ穴という話。どうやら払えそうもねえな。だけど体を張つてもやるらしい、何でその芝居に執着なさるんで。

浩平 よくぞ聞いて下さいました。外題は“肥後石工水之口橋別離ひごのいしくみづのくわしのかたれ”と申し私が創作したものです。旅巡業向けの人情物ですが、私の石橋に掛ける思いが籠こもっています。

私の出は元々現代劇ですが、日本人の心情に触れるような芝居をしたく、一座を結成しました。それでこのようなものを中心に、巡演を致しております。

新子 「遠くを見る目つきで」 石橋つて、どんな話なのかい。

浩平 江戸時代の終り頃、薩摩藩で橋を架けた肥後の石工の物語です。土地の実話で伝えられたものを脚色し、人情仕立ての芝居に仕上げました。きつと観客の皆様には、楽しんで頂けると存じます。

二重橋・日本橋・万世橋・江戸橋・浅草橋・神田橋

石工たちは後に江戸にも召されて、旧の二重橋の石橋など沢山の石橋を架けました。

新子 「ポツンと」 あたいのうちの近くにも、石橋があったよ。今でも夢を見る。

浩平 「新子に」 お姐さんも、石橋のある所で育ちなすった、もしかしたら九州のどこかで。

新子 まあいい、昔の夢だ。国夫この人を何とかしてあげて。

国夫 「組員たちに」 分かった。俺も石橋には多少なりとも、思い入れがないこともない。まあそれはいい。お前たち、この人を助けてやれ。聞けばお前ら得意の人情物というじゃねえか。ここは狭気一番、一肌脱いでやったらどうだ。ただ手ぶらという訳にも行くまい。

どうだ、前売を少し捌いてやって、一部を礼金として戴くことにしたら。そうだお前たちに、この酉の市の熊手をやろう、この縁起物で精々おあしを掻き集めな。

組員丙 せっかくのチーフのご仲裁ですが、あつしらの独断で決める訳にはゆかねえのです。

国夫 このご仁は芝居をやる以上は、逃げられまい。大丈夫だ、お前たちの兄貴には、俺から話しておく。

*国夫が熊手を組員甲に渡し、甲が押し戴く。

組員甲 チーフにそう諭されちや、あつしらの兄貴も嫌とは言えぬ。ようがす、ここは花組の兄いにお任せしやしよう。

国夫 それで良からう。決まったらさっさと退散しな。

組員乙 へえ、それでは失礼致しやす。

*組員たちが、熊手を担いで退場。

*浩平は乱れた髪と裾を直し、

浩平 どうも危ないところを、お助け頂き有り難うございます。私は芝居者の浩平と申します、お見知りおき下さい。お姐さんにも親切にお口添え頂き、感謝致しております。どうぞ兄さんのお名前を伺いとう存じます。

国夫 問われて名乗るもおこがましいが、紅屋一家の国夫と申す吝な野郎でござんす。冗談はさておき、円く収まって良かったぜ。上がりの件は、できる丈被りが少ねえよう、俺からも話しておく。このお姐さんの肝煎じや、仕様がねえな。

そうとなつたら、早く芝居の準備に掛かりな。俺も新子も、気が向いたら見に行くぜ。何しろ上がりが出なきや、保証人の俺も困るでな。

浩平 重ね重ねお礼申し上げます。それでは兄さんも姐さんも、ここで失礼致します。どうかお二人とも、是非芝居を観に来て頂きとう存じます。

*浩平退場、新子が先程の預り物を国夫に渡す。

国夫 うん、これは。

新子 さつき密航者らしい男から、あんたに渡すよう頼まれたのさ。警官に追われていたんで、もう捕まってるんじゃないか。客にしたんだが、お金だけ呉れて必死に縋るし、可哀相になつて引受けたんだよ。でも何であんたは、あんな連中に係わりがあるのかい。

国夫 うん直接に係わりはねえ。一寸とした取引の絡みだ。そのとき誰も、お前を見てなかったか。

新子 大丈夫と思うけど。

*国夫がぶるっと身震いし、空を見上げて、

国夫 おおもう初時雨の頃か、やけに冷え込んできた。日も段々短くなる。

「真剣な顔で」 念のため用心しろよ、どんな奴が、この辺りをうろついているか分からねえ。俺に渡したことは、絶対他人に漏らすなよ。 「新子が頷く」

第五場 盛り場にある公園

*師走の宵の口、街頭放送からジングルベルの唄。ベンチに置いたラジカセから賑やかな音楽が鳴り、背の高い金髪と小柄な黒髪の二人の外国人娼婦が踊る。新子が登場。娼婦たちが踊りを止める。

金髪 おや新子姐さん、この前は美味しいチーズを有難う。最近本場ものが中々買えなくて。

新子 手に入ったらまた上げるよ。最近の景気はどうだい。

金髪 全然だめよ、この国では、師走の風が身に沁みると言うそうなの。栄養足りなくて、自慢のおっぱいも、垂れ下がってしまうよ。本当に日本人は、乳牛みたいなおっぱいが好きね。

〃おお牧場は緑、牛乳石鹸良い石鹸〃 日本人は、牧場の牛に憧れているのかな。

黒髪 もっと早く、景気がアップしないかな。昔貧しい日本から、カラユキさんが外国行った。

今は逆、私たちジャパユキさんね。でも新子姐さんが、私たちの国の人抱いて呉れる、私たちが日本人抱く、おあいこだよね。

新子 この商売では二人とも、この国のパイオニアなんだから、確りやって頂戴。

金髪 有難う。後に続くものたちのために、一生懸命お客にサービスするわ。お寒い、暇だからせて踊りましょ。賑やかに。私たちはダンサーということで、この国に来たんだよ。

*三人が踊り出す。

新子 雀百まで踊り忘れず。

黒髪 何それ。

新子 人間は幾つになっても、遊ぶことだけは、覚えているということよ。

*三人が屈託なく笑う。浩平が登場、踊っている新子に挨拶する。

浩平 この前は有難うございました。地獄に仏とは月並な言いようですが、お陰様で正月から公演することになりました。あの折は満足な挨拶も出来ず、お姐さんのお名前さえ、伺えませんでした。

新子 「踊り止め」 私みたいな女に、ちゃんとした名前もないよ。皆は新子と呼んでいるようだけど。

浩平 新子姐さんは、たしか九州の出身と仰いましたね。

新子 うんまあ、そんなとこだけど、あたいの親があちららしいから、そう言った迄さ。

浩平 今日お礼を言上したいからと、さつき申しましたが、本当はお姐さんに、もう一度会いたかったのです。

新子 「横を向いて」 あたいみたいな女に会って、どうするのさ。あまりくつついたら、鎌鼬かまいたちにやられたようになるよ。

浩平 でも、どうしても会いたかった。言い難いけど、お金を払ってでも、お姐さんと話したかった。

新子 「手を振り」 そんなこと、いけないよ。あんたも早く小屋へ行って、芝居の支度なさい。

*音楽が終わり娼婦たち退場。バヤン登場。

バヤン 新子さん暫く。どこへ行ってたの、早くあなたに会いたかったよ。

新子 バヤン、あんたとも久し振りだね。今晚付き合っただけよ。

*浩平は悲しげに首を振り、悄然と立ち去る。

バヤン あれ誰。

新子 あれは芝居の座長。

バヤン 芝居、ああドラマね、それより新子さんあなた危ない。この前何か預かったでしょ、誰に渡したの。怪しい人たちが、あなたを捜していたよ、用心なさい。じゃ十時に、またここへ来る約束ね。〔退場〕

*帽子を目深に被り、変装した国夫が登場。

国夫 新子、来ていたのか。

新子 「覗き込む」 あんた誰、あれ国夫じゃないか。どうしたのさ、そんな格好をして。何を慌てているんだい。

国夫 しっ、新子早く身を隠せ、訳は聞くな。取り敢えずここから消えろ、当面ここに顔を出さない方がいい。目立たぬよう、ちよつとベンチで話そう。

*枯葉を払い、新子をベンチに座らせる。

新子 何だい突然に。そう言えばさつき、バヤンも同じことを話してた。訳も分からず言われたって、動きようがないだろう。

国夫 実はこの前預かったものが、お前の仲介だったことが、ある組織に分かってしまった。こ

れと敵対する勢力も、それを知っていて、お前が誰に渡したのか探っている。組織とは紅屋一家のことじゃねえ、ある結社だ。実を言うと俺はその一員で、今の組は隠れ蓑だ。

結社の方も、俺の秘密が割れるのを恐れており、口封じのため、そちらからお前は狙われるかも知れぬ。

新子 急にとんでもない話を聞いて、ちんぷんかんぷんだが、どうやら、あまり良くない状況のようだね。お前さんは大丈夫なのかい。

国夫 俺のことはいい。早くここから消えちまって、もうここに現れるな。冬籠りみたいにせよとは言わぬ、己の本当の姿に戻るんだ。

新子 「立ち上がり」 お前さん、あたいのこと知ってるんだね。

国夫 何でお前は、こんな仕事をしているのか。実は偶然、その通勤姿を見たのだ。目を疑ったのは事実だ。どうにも分からねえ、こんな仕事は早く止める、早く本当の自分に還りな。でないと碌なことはないぜ。

早く岡野蘭子に戻るんだ。新子じゃねえ、きれいな体の蘭子だ。今ならまだ間に合う。

新子 「叫ぶ様に」 あたいは新子だよ、あなたの友達の新子だよ。蘭子じゃないよ。

国夫 「立ち上り」 まだ分からねえのか、じゃこちらの身上もぶちまけよう。実は俺は母は日本人だが、国籍は別の国、二世という訳だ。さっき結社と言ったのは、母国の反政府組織のことで、俺はその一員だ。

一見政治と関わりの無さそうな、紅屋一家に籍を置いているのも、そのためだ。

新子 あんたそんな大事を、あたいに話していいのかい。

国夫 お前のことは信用している。俺はどうでもいい。そっちの身の安全のため、事情を打ち明けてるんだ。

新子 あんたは、あたいを信じて呉れてるんだ。そう言えば、そんな言葉は、久しく口にしたことがないよ。

国夫 お前のその生き方は、どうにも理解できねえ。今まで何を考えて生きてきたんだ。

新子 「激しく」 私の実の父は、祖国に忠誠を誓った軍人だった、祖父も。そして戦争に負けたあの日、父は二重橋の前で自決して果てたのさ。信じるものが消え失せて、心の中にあつた世界が崩壊するのに、耐えられなかった。

その上の曾祖父だって、明治の初め時の政府に背いて、西郷軍に身を投じ戦死したんだ。皆信じるものが、頭に描いて来た世界が、消え失せてしまって、肉体もお供をしたんだよ。

父は戦死したものとばかり、思っていた。でも真実を知った時から、私は父の生き方に抗ってみたくなった。何かを信じる以前に、自分がここにいることから、生きようと思ったのさ。誰のものでもない私に、体を捧げようと決めたのさ。

*国夫が立ち上がって、いきなり新子の頬を平手で叩く。

国夫 馬鹿野郎、一人よがりの訳知り顔で、いい気になりやがって。自分のために体を捧げる、

何言ってやがる。ただの娼婦じゃないか。いいか、早く目を覚ませ。

今のお前は、岡野蘭子の体から迷いでた亡霊だ、影なんだ。それは生きてるんじゃないやねえ。その人間の根っ子にある、不安や無意味さや挫折感から出てくる幻だ。

*新子が激しく泣き出す。

新子 「国夫の体を叩き」 そんなことはない、今あなたの体を叩いているじゃないか。新子や蘭子は、只の符号だよ。現に私という私は、ここに居る、私はあなたの前に居るのよ。弟を生んで暫くして母は亡くなり、私は五歳になるまで、他人に預けられて育った。大事にされても、何かしら不安だった。だから、見たこともない父が無性に恋しかった。

近くに石橋があったの。いつもその下に佇んで、大きな空間を見上げていた。そのどこかに父が生きているような気がして、アーチに向かってお父さんと呼んだ。だが私の声が餌するばかりで、何も答えてくれなかった。

私という私はこの世に在るのかしら、と疑ったときもあった。そんな石橋が懐かしいけど、少し憎らしい思い出となって残っていた。でも二重橋の前で死んだ父の事を知った際、その下でお父さんと呼んだのは、やはり間違いではなかった。

そう思っただけだったわ。私は生きてるんだと、やっと信じられるようになった。

*国夫が新子の背中を撫で、ポツンと漏らす。

国夫 実は俺の祖母は、からゆきさんだった。西九州の片隅の島に生まれ、貧しさから身を売って、異国で父が生まれた。祖母亡き後成人した父は、その国に憧れて渡って来た、だが心中は複雑だったに違いない。父と二人で、祖母の故郷を訪ねたことがある。

だが一族は結核で死に絶え、残っていたのは誰もいない、荒れ果てた家だけだった。

お前の育ちとは、天と地程も違う悲惨な光景だ。それなのにお前は俺の祖母と同じようなことをしている。こんな過去は、誰にも話していなかったが、とうとうここで話してしまった。歳月でさえ風化できない、過酷な現実もあるのは、お前にも分かるだろう。

*新子が頷き黙って身をすり寄せ。暫くそのまま。

国夫 この前易者さんが、諧謔も一皮剥けば、自己嫌悪と言ったのを覚えているだろ。鏡を見るがいい。夢見る革命家取りの顔も、この国で暮らす道化た顔も、どちらもおれ自身だ。

今は一人前の顔をして、運動に携わっているが、初めから高邁な理想に燃えて、加わった訳じゃねえ。元々素姓育ちを紛らわそうとした、弱い人間だ。大学も中退し、盛り場で喧嘩三昧に明け暮れていた頃、詰まらぬ事で、紅屋一家の連中と争いになった。

袋叩きにされ、危うく簀巻きになるところを、一家のある幹部が救って呉れた。その幹部は偶々俺と同国人で、持前の義侠心から、母国の反政府運動に肩入れしていた。俺を見込んで、結社の一員に送り込んだという訳だ。

易者さんには、俺のそんな薄っぺらなところが、ちらちら見えるのかも知れぬ。こんな男が、つべこべ言える資格もないが、お前を見ていると、どうしても黙っていられねえ。

新子 あんただって、弱いところもあるさ。人間だものね。でも嬉しいよ。他人には明かせない心の内を、あたいには話して呉れた。お前さんはきつと、真面目な道化なんだよ。国夫 子供の頃、近くに動物園があった。入口から並木道になっていて、ずらりと猛獣の檻が並んでいた。俺はいつも動物たちに、後ろめたく思う気持ちを引きずって、鉄の格子を覗きこんだ。

黄昏時になると、餌の臭いと悲しげな声が風に乗って来る。ときに祭日の閉園の夜など、万国旗が揺れていたのが、妙に侘しく記憶に残っている。動物園の檻で、動物たちがどんな夢を見ているか、お前は想像したことがあるか。

「首を振る新子を抱き、空を見上げ」

俺たちの手の届かぬ処に、計り知れぬものが出て、それが神様か悪魔か分からぬが、俺もお前も目に見えない檻の中に、囲われているのかも知れねえな。

おお雪が散らついて来た。街の灯が狐火のように瞬いている、名残の空だ。俺にとってもお前にとっても、今年は何存在感のある年だったと思いたいなあ。

第二幕

第一場 岡野家の別荘

*早春の夜、調度品は無くなり、椅子とテーブルだけのガランとした室内。暖炉の上に、ワイン瓶とグラスに古いラジオ、備前焼の瓶子に、紅侘助椿が一輪。椅子に藍子と蘭子。残り火だけの暖炉。

藍子 「火搔棒を手に」

“雪の降る夜は 楽しいペチカ ペチカ燃えろよ お話しましよ

昔々よ 燃えろよペチカ

雪の降る夜は 楽しいペチカ ペチカ燃えろよ じき春きます

いまに楊も 萌えましよペチカ

雪の降る夜は 楽しいペチカ ペチカ燃えろよ 誰だか来ます

お客さまでしよ うれしいペチカ”

この火搔き棒も、もう要らなくなるのね。大正、昭和からここにあった調度品も、あらかた処分してしまつたわ。侘助椿がちょうど咲いたので、備前に挿しておいたよ。お別れにはこんな椿が相応しいのね。 *童謡「ペチカ」北原白秋作詞、山田耕筰作曲 歌詞一三四番

蘭子 侘助さん、今年も春のお告げ有り難う。さあお母様気を取り直して、この家に最後のお別れをしましょ。お父様たちも、きつと許して下さいさるわよ。

*蘭子がワインをグラスに注ぎ、二人が手に取る。

蘭子 「快活を装い」 おじいちゃまたち、お父様、このお家で過ごした日々楽しかったわ。お母様も蘭子も、感謝の気持ちで一杯よ、本当に有り難う。でもお別れよ、岡野家の百年、色んな思い出の籠ったこの家に乾杯、そして左様なら。

*二人がグラスを合わせ口をつける。藍子が背中を向けて、掌で顔を被い、グラスを暖炉の縁に落とす。静かな室にグラスの割れる音。

藍子 蘭子、ほんとに最後のね。 「咽ぶ」

*蘭子が藍子を抱き、背中を撫で暫くそのまま、やがて藍子が大事そうに封筒を取り出す。

藍子 覚えているかしら。あなたが高校生で、私が病気で入院しているとき、呉れた手紙よ。この家の窓から見た風景、気に入ったので、大事にとっておいたの。別れに相応しいのかも知れない。

藍子

” 丘全体が狐につままれたように

明るくて雨が降って

辺りの音も聞こえません

向こうの丘の桜の太木から雨が落ちて

なのに水道タンクは光っています

きょうは ひなたあめ 日向雨

なんだか嬉しくて 哀しくて

どうすれば どうしたの

意味もないことを呟きながら

ひとを傷つけることなどもうしまい

明け方に夢を見るだけだから

振り返れば

心は神話の岩になるのです

予感のような春風が吹いてきて

窓辺の大事なランプを割ってしまいました ”

蘭子 「涙ぐむ」 私にもこんな時があった。お母様有り難う。

藍子 「立ち上がり」 忘れないうちに、出掛けに部長さんから、あなたに言伝ことづてがあったわ。今度の応募論文が、入選候補に挙がっているらしいわよ。聞いたけど、難しい題名だったので、失念したけど、何と言いましたっけ。

蘭子 “経済発展段階における相対的価値観と人間の社会行動についての一考察” 長い題でしょう。

藍子 私には内容はよく分からないけど、部長さんは誉めてらしたわ。わざわざお知らせさせたのよ、お礼の電話をしておいて頂戴。きつとお父様も草葉の陰から、あなたの成長を悦んでいらつしやるわよ。ここで最後の夜は、私の部屋で過ごすことにします。

あなたはまだ名残りを惜しんだらいいわ。 「退場」

*蘭子が今の手紙の紙片を破り、暖炉の中に撒き、ラジオにスイッチを入れる。「アメリカの遺言」の曲、暫くして声が流れる。

ラジオ 先程中断しました九州地方の話題を、改めてお伝えします。

市内のその石橋は、九州で最も古いものとされ、江戸末期に、肥後と薩摩の石工いしくたちによって架けられたものです。明治の新しい日本を象徴したようなこの石橋も、今回の水害と共に被害を受け、一世紀を過ぎた今、別の橋に架け替えられることになる見通しです。

文化財とも言える、この石橋について、惜しむ声が挙がっています。単に撤去するか、今後並行して新しい橋を架け石橋を保存するか、別の場所に復元移築するか、今後様々な論議を呼ぶと思われます。また音楽に戻ります。

蘭子 家の近くにあった、あの橋のことかも知れない。放送は、百年の挽歌のように聞こえる。

私の胸から一つ、灯が消えてゆく。 「目を瞑り、やがて眠りに落ちる」

*暗転、「水之口橋」(戯曲「肥後石工水之口橋別離」登場)の情景。下手から中程まで石橋、上手は樹の茂る夏山、上手寄りに小観音堂あり。

明治十年の西南戦争、官軍将校姿の八郎が下手から登場、辺りを見回し呼ぶ。

八郎 十郎。

*戦塵に塗れた薩軍姿の十郎が、橋の陰から登場。

十郎 兄者あにじや。

*互いに手を握り締める。

八郎 やはり、ここへ来とったか。この橋を北と南へ別れたのは、一年半前じゃった。

十郎 約束を忘るるものか。東京と薩摩に別れても、互いに国のため尽くそうと、この橋で誓い合うたではないか。

八郎 「後ろ振り返り」 八代で上陸した政府軍が、すぐ後ろに迫つとる。僕は先遣隊じゃ。急いで話す。西郷軍の本体は、田原坂で敗退して壊滅状態じゃ。西郷先生の生死さえ、定かじゃなか。絶望的な戦いを、いつまで続くとか、不本意じゃ。

あたら有為な若者たちが、命を失うとる。

十郎 「刀の束を握り」 我らの決起は、決して士族の不平不満じゃなか。現に自由民権を唱うる熊本士族の有志も、協同隊を組織して参加し、共に戦うて来た。政府の有司専制を排し、腑抜けの腐った幹部を糾弾せんとする。王道から逸れて行く、この国を正さんが為た。

八郎 「手を振り上げ」 日本国は欧州列強に、後れをとつちやならん。内乱で揉めとる時じゃなか。それが分からんのか。佐賀、神風連、秋月、萩の乱みんな即鎮圧されとる。国の力を削ぐ者は、賊と言われても仕方のかなか。

十郎 西洋の覇権主義の猿真似は、沢山じゃ。千年掛けて磨き抜いた、日本人の品性、徳も義も恥も失わるる。空疎な魂は、政府や官吏や軍の横暴を生み、国力は栄えても、個は無視され民は愚かになる。百年後の品格を欠いた日本が、一体どうなつとるか、想像出来るか。

八郎 多少の行き過ぎはあるう。それは近代化の宿命と言ふもんじゃ。今は議論しとる暇はなか、西郷軍の本隊は、山中伝いに薩摩に引き上げとる。そなたたち分隊は、早う解散して帰順せい。今なら間に合うかも知れん。一旦罪に服して、また国のため尽くすのじゃ。

十郎 「首を振り」 折角じゃが、僕は兄者に別れを告げるために、ここへ来た。瘦せても枯れても、我らには義を尽くすという、もののふの魂があつた筈じゃ。今から鹿児島に戻り、西郷先生と命運を共にする積りだ。我らの志が、日本国の捨石になれば本懐だ。

八郎 そなたがそこまで唱えるのなら、止むを得ん。兄弟といえども、信念は譲れん。今生の別れじゃ、存分に見事な戦いをせよ。早う行け。 「指差す」

十郎 兄者、さらばじゃ。未練のようじゃが、東京に置いた幼い家族を頼うだぞ。

八郎 引き受けた、心配するな。武士らしい、立派な最後を遂げよ。

*八郎が目頭を拭き、上手に駆けて立ち去る。十郎は見送り、同じように目頭を拭く。

*蘭子がうたた寝から醒める。

蘭子 父は十郎曾祖父が抗った筈の、その後の国を信じてしまった。誤った大義に進んだことを詫びるため、己を処断し、二重橋の前で自決した。岡野の父は戦後の日本を信じ、心身を酷使して、事業と病に埋没した。岡野のお母様は、華族の栄光の亡霊を信じている。

私は何を信じているの。影でもいいから何を信じているの。経済統計の豊さを信じたの。いま夢に見た橋は、さつきのラジオの橋よりもっと北にある別な橋だけど、近くに原子力発電所の建設が始まるようだ。こんな大きな流れの中で、この小さな体を信じきれるの。

お母様、お母様と私は、曾祖父たちが橋で別れた時から、別な世界だったのよ。一緒に居た三

十年が夢だったのよ、やっぱり私は、石橋の方に戻ったのよ、
可哀相なお母様。 「こみあげてくる蘭子」

第二場 千鳥ヶ淵公園

*夕刻、花の蕾が綻び始めた桜並木。少女像とパーゴラ。長ベンチの前で、新子とバヤンが立ち話。像には毛糸の帽子が被せてある。

バヤン 新子さん、時間取らせて済みません。ここにいらつしやると聞いたので、急いで来ました。話と言うのは、わたし会社の都合で、九州へ行くようになった。暫く会えないので、お別れを言いたくて。

新子 花見には少し早いけど、待ち合わせを兼ねて、ここに来たのよ。まだ時間が早いから大丈夫よ。ところで、あんた九州へは何しに行くの。

バヤン わたしは石材加工の技術習得で、この国へ来ているの。今度九州で、百年以上経った石橋を、取り壊すことになった。それで会社が工事を請け負ったので、勉強も兼ね、親方と一緒に仕事に行くのよ。何でもその石橋は、別なところに架け替えるらしいけど。

新子 この前ラジオで放送していた、あの橋がそうだわ。この前夢で見た橋とは、別のものよ。うだけど。いずれにしても、あたいの心の原点だよ。

バヤン なに、それ。

新子 何でも無い。古いものは、みんな壊れてゆく。でもこの千鳥ヶ淵に続く濠、日本の中心に、二重橋の石橋は、今も厳かに座っているよ。それも旧の橋は、あんたが壊す石橋と同じ石工が、架けたんだよ。

バヤン 新子さん。 「真剣な表情」

新子 何だい、真面目な顔をして。

バヤン 「直立不動で」 わたしと、結婚して下さい。

新子 突然何を言うの、こんなあたいに向かって。

バヤン 真剣です、結婚して下さい。そして私の国に行きましょう。こんな国から早く出てわたしの故里に行きましょう。不慣れた土地ですが、毎日神様のいらつしやる山が拝めます。昔の日本の人が、富士山を拝んだように。

新子 “散りぬれば後は芥あなになる花を、思ひ知らずも惑ふ蝶か哉” この国の古い歌よ。散れば芥になるあたいに、そう言うて呉れるあなたは、蝶々みたいに純真な人よ。

「桜を指差し」 だけどあたいは、この桜の花が咲いて散る国から、出て行けないのよ。この樹だってこの土だってこの水だって、見てご覧、あたいたちのいのちを、何千年も掛けて育はぐんで呉れたのよ。

バヤン 「新子の両掌を握り締め」わたしの国の川には、小さな石橋があります。それは自然の石で作ったもの。誰もが、自然をそのまま生かした中で暮らしています。無理していい、あなたも自然に生きるがいい。わたしの国に行きましょう。

新子 そう言えば、あの石橋を作った名人の終生の願いは、自然にある石だけで、美しい橋を架けることだと聞いた事がある。でもそれは、賽さいの河原の石積みのように難しい。

バヤン 「合掌し」わたしの国には、幼稚な橋にしてもそれがある。すぐ返事なくても良い、仕事から帰って来るまで、考えておいて下さい。

新子 バヤン、お願いがある。あなたが石橋を解体した時、石の欠片かけらを一つ持ってきて欲しい。バヤン なぜ。

新子 私のいのちのかけらだから。

バヤン 分かった。途中で帰ることもあるから、そのとき必ず持って帰る。では今から、九州へ出発するから失礼します。さっき言ったことは、忘れないで下さい。

新子 あなたの気持ちは嬉しいわ。元気でね。 「二人握手」

*バヤンが退場、新子が上手の隅で待つ。

*国夫が登場。金太が走って来て、声を掛ける。

新子もいったん出ようとするが、躊躇ちゅうちゆってそのまま。

金太 ここに居ると聞いたので、追いかけてきたんだよ。花見には少し早いようだけど。

国夫 新子に話したいことがあって、ここに来たんだ。

金太 新子姐ねえさんは、まだだよ。 「辺りを見回す」

国夫 何をしよぼくれてるんだ。

金太 だって、この指令書を読んでみて呉れよ。 「メモ渡す」

国夫 「声を荒らげ」いくら命令でも、こんなことが出来るか。

金太 これを受け取ってよ。小瓶の中は恐ろしい薬、念のため二つある。水みづに溶とかして、飲むよ。うになっっている。

*小瓶を渡そうとするが、受け取らず。

国夫 「憤然ふんぜんと」こんなのが、受け取れる筈がねえだろう。

金太 だってこれは、結社の指令だよ。僕だって、こんな残酷な使者はいやだ。

「顔を歪める」新子姐さんは、いつも優しくして呉れる、そんな人を消すなんて。

国夫 他に方法はないのか。

金太 僕たち二人とも命を賭けて、母国の反政府運動をしてるんだよ。お兄さんだって、命令に背けない位分かってるだろう。ああ、だけど気持の上じゃ、承服出来ない、僕の方が死んでし

まいたい。死神には、なりたくないよ。

国夫 俺は断然断る。

*金太が小瓶を、国夫のジャケットの横ポケットに押込む。

金太 では渡したよ。 「掌で顔を被いながら、走って退場」

*入れ替わりに、易者が折畳みの机と椅子を抱えて登場。新子はそのまま。

国夫 「暫く考え込むが気が付き」 おや易者先生、今日はどこまで出張か。

易者 今日は下調べ、花見客相手は商売になるからな。あなたも気の早い花見かな。

国夫 新子に話したいことがあって、待っているのさ。

易者 「扇子で手を叩き乍ら」 それよりもお前は、早く身の振り方を考えた方がいいと思うよ。

国夫 何を言う、それはどんな意味だ。

易者 お主の正体は早晩、己の母国の政府側に知れるだろう。

国夫 「身構え」 あんたは、一体何者なんだ。

易者 誰でもいい、暫く近くにおいて、お前のことが良く分かった。お主ほどの男を、みすみす危険に曝さらしたくない。でなきや、新子も可哀そうだ、反政府側は口止めのため、あの女をほっとくまい。それに彼女は、蘭子と新子の二重生活に疲れている、私には分かっている。

国夫 一体何を言いたいんだ。

易者 「押し切るよう」 有体あつていに申せば、早く自分の国に出国し方がいい。必要なら手を貸そう。

この国にいて危険に晒されるよりまだましだ。体制側は、反政府組織の秘密口座を管理しているお前から、資金の提供先を聞き出そうとしている。

国夫 「眼を光らせ」 あんたは、何を狙っているのか。敵か味方か。

易者 敵でも味方でも無い。とにかくこの国で面倒を起こしてもらいたくないだけだ。

国夫 その正体は良く分からぬが、ご忠告として聞いておこう。だが俺だって、この国で生まれ育った男だ、簡単に離れる訳にもゆかぬ。

易者 「独り言」 今は立場は違うが、昔お前の父上に、私は助けられた。いい人だった。やれやれ、人があちらへ動き出した、移動することにするか。 「机と椅子を抱え退場」

*入れ代わりに、新子が上手隅から登場。

新子 お待たせ。

国夫 遅かったな。

新子 悪いけど、今話を立ち聞きしてしまった。

国夫 易者の話だけか。

新子 「一寸まごつくが」 そう、その前に誰か居たの。あの人の意外な話を聞いて驚いたけど、

その前のことは知らないよ。易者さんが言ってたけど、まさか他の国へ出国など、本気で考えるんじゃないからね。あんたは、どこへも行かないよね。

国夫 どうして、しかしお前は、

新子 「話を遮り、激情に駆られ」 国夫、あたいを抱いとくれ。汚いと思うかも知れないが、あたいを抱いとくれ。温めて呉れるだけじゃ否だよ。あんたにとって、あたいは只一人だ、あんなに確かめて欲しい。

国夫 何度言ったら分かるんだ。お前は新子じゃない、岡野蘭子だ。

新子 「叫ぶ」 あたいは新子だよ、あんたの友達の新子だよ。それとも綺麗な体の蘭子と言わなきゃ、抱いて呉れないのかい。この前も話したろ、名前なんて符号だよ。

国夫 俺はお前を、汚れているなぞ思っていない。でも何故、俺にそんなことを言うんだ。

新子 あんたは理屈ではなく、私のことを分かっている。あんたは私と一緒に。この前一緒に芝居を見た。あの時あんたの横顔を見た、あの厳しい表情は、私と同じだった。

国夫 この前打ち明けたことその他、まだ伝えてないことがある。実は俺の父は、昭和二六年の二重橋メーデー事件で負傷し、それが原因で結局命を落としたのだ。デモ隊に参加したのか、偶然に巻き込まれたのか、知らない。

だが親父は、恨みがましい様子は一切見せなかった。元々は芝居に登場した石工が架けた二重橋、その前で父は傷つき命を落とした。この前石橋への思いがあったと言ったのは、このことだ。それが、お前の見たその時の表情だ。

新子 「溜息」 そうだったのか。私と同じようにそれが、あんたの生き方に、係わってきたのかも知れないな。

国夫 この前は、俺の屈折した生き方が、母国の政治運動に首を突っ込むきっかけと言った。だが心の底には、親父の無念の思いも潜んでいたのだろう。加えて俺には分かっている。異国で、望郷の思いの叶わぬまま死んだ祖母、その血がこの体には流れている。

金太も同じ国籍だが、彼のような純粹な三世とは違う。俺のこの国への思いは、このようにもつと複雑だ。

新子 「国夫の手を握り」 偶然なのか、二人とも二重橋の前で父親を亡くした。そして二人ともそのことで、生きざまが引き裂かれている。私は何とも言えぬ激しい感情を、あんたに抱いていた。今その理由が分かったような気がする。

もう抱いて呉れとは言わない。抱かれなくとも、あんたと私の心はいつも寄り添ってるんだ。国夫 今はすべてを忘れよう。この千鳥ヶ淵の隣りの霊園には、無名戦士の棺が眠り、道をまたげば、靖国の社に昭和の魂が眠る。淵の向こうには二重橋、お前の父や俺の父の魂が眠っている。桜の供養だ。咲き初めを束の間、この人たちと共に眺めることにしよう。

「新子の肩を抱く」

新子 “ 仏には桜の花を 献れ 我が後の世を人とぶらはば ” 桜は西行の心を照らしてくれる

鏡だった。私たちを支えてくれるのは何だろうね。 「無邪気な声になり」

ほら見て見て、少女像の頭に、可愛い帽子が被せてあるわ、悪戯いたずらかしらね、忘れ物かな。

* 国夫が像を見ている間に、新子がそっとポケットから小瓶を抜き取って隠す。

国夫には小瓶一つが残る。

第三場 経済研究所オフィス

* ビジネススーツの蘭子が、後向きに座る。

ストッキングを被った三人（紅家一家）の男たちが登場、蘭子を見詰める。一人が頷き、もう一人がそっと忍び寄る。

男甲 「蘭子の口を塞ぎ」 騒ぐな、質問にさえ答えて呉れば、手荒なことはしない。

* 蘭子が身悶えし乍ら頷く。二人が逃げられないように、両脇を固める。

男乙 あんたは岡野蘭子か。

* 蘭子が頷く。

男丙 新子の後を追ったら、岡野の屋敷に入って行った。それで出て来たのはあんただ。どうも分からぬ、あんな娼婦が、どうしてこんな門構えの家に縁があるのか。

男甲 あんたの家に、新子は住んでいるのか、それとも時々訪れるのか。

* 蘭子が黙っている。

男乙 「詰問調で」 黙っていちや分からぬ。新子はお前の姉妹か。

* 蘭子が頷く。

男丙 見張っていても、屋敷から出て来た形跡は無いが。家に居るのか、それともそっと出て行ったのか。

* 蘭子が頷く。

男甲 では、どこへ行ったんだ。

* 蘭子が首を横に振る。

男乙 「顔を覗き込み」 どうもおかしい、そっくりだ。よく似た姉妹だ、それとも双子か。確かにあの屋敷に、新子が入って行った。とにかく、居場所を教えてもらおうか。

* 蘭子が首を横に振る。

男丙 では新子は、頼まれた物を誰に渡したか、聞かなかったか。

* 蘭子が激しく首を横に振る。

男甲 「首を傾げ」 組織員が、大事な物を新子に預けたのが、そもそも怪しい。あんな盛り場で、政治運動に首を突っ込む奴が居るのか。それとも、あんた自身に渡したのか。

* 蘭子が大きく首を横に振る。

男乙 「腕を組み」 どうも解せぬ。さてどうするか、お姐さんに来て頂いてゆっくり問い詰めるか。

*浩平がドアからそつと室内に入り、携帯用の警報ベルを取り出し、窓カーテンの中に隠し、机の陰に隠れる。警報ベルが鳴り出す。

男丙 拙い、誰かが知らせたらしい。引き揚げるぞ。

*三人が慌てて退場。

*浩平が机の陰から顔を出し、ベルを止める。

蘭子 「吃驚して」 あなた浩平さん。

浩平 無事で良かった。何と呼べばいいのか、本当に新子姐さんですか、それとも蘭子さんですか。

蘭子 「蘭子の口調」 どちらでもお好きなように。とにかく有り難う、今度は私が助けてもらったわ。どうしてここが分かったの。

浩平 あなたのことを思い切れず、悪いけど後をつけて行きました。表札は表に出ていなかったが、驚きました、今でもどうにも信じられません。さっき聞いたけど、蘭子さんと言われるんですね。

蘭子 「話を逸らし」 この前、国夫と芝居を見に行ったわ。私を感じていたように、あの水之口橋には、人間の魂が籠っているのがよく分かった。

浩平 「丁寧な頭を下げ」 有り難うございます。舞台からお二人に気が付いていましたが、ご挨拶に参上した時は、退出された後でした。ご無礼をば致しました。立派な舞台を務めることが恩返しだと思つて、懸命にやらせて頂いております。

蘭子 また楽日にでも、見に行きたいと思つています。

浩平 是非に、お待ちしております。ところでお姐さんは、この前確か石橋の近くで育つた、と申されましたね。

蘭子 「遮るように」 小さいとき、暫くの間居ただけ。まあそんな話は止しとこう。

浩平 「悲しそうに」 お姐さんしつこいようだけど、まだ信じられない。こんな立派な仕事に就いていながら、どうしてあんな夜の仕事を。

蘭子 「蓮つ葉な口調で」 ここは表のオフィス、あなたと会つたのは影の町。あたしはその両方に棲んでいる。どちらもほんとの私さ、蘭子も新子でも、これこの通り一人の体に変わりやしない。

浩平 私は新子姐さんの方に、惹かれています。

蘭子 「新子の口調」 馬鹿言うんじゃないよ、新子に惹かれたなんて。あいつは町の娼婦だよ。あんなんかが、興味をもつ代物じゃないよ。

浩平 お姐さん、どうして二人いるのです。

蘭子 あんただって、以前は陽の当る表舞台、今はあの芝居に憑かれて巡業、二つの場面だ。あたしは昼と夜、それを使い分けしているだけの違いじゃないか。

浩平 「熱っぽく」 私はどうしても、あの芝居を上演したかった。百年前日本の近代化が始まった頃、あの石橋群は架けられた。今架け替えられて行く石橋もあるが、肥後と薩摩の石工が最後に架けた、水之口橋はまだ生きている。

私の曾祖父はあの橋を渡って、西郷先生の許に馳せ参じたと聞いています。

蘭子 この前夢に出てきた橋は、芝居で見た水之口橋のように思える。ところで浩平と言う名前、あなたの本名なの。

浩平 いえ、それは芸名で、本名は浩介と申します。

*蘭子が息を詰める。

浩平 どうかしましたか。

蘭子 いや、何でもないわ。

浩平 新子姐さん、私はどうしても、あなたの事が忘れられない。あなたを抱きたい、許して下さい。さい。

*蘭子を抱き締め暫くそのまま。

蘭子 「抱かれたまま」 浩平、あなたは私の弟だよ。

浩平 えっ。 「思わず手を離す」

蘭子 私の名前は岡野蘭子、聞き覚えがあるだろう。

浩平 「呻くように」 岡野、私の実家の名前です。

*蘭子が浩平を抱き締める。

蘭子 「泣き乍ら」 二人で遊んだあの石橋のこと、覚えているかい。だからあなたは、今度の芝居を作ったんだろう。あんたが養家先に貫われて行くとき、握り締めた紅葉のような掌、離れていった時のことを、私は忘れていない。

浩平 あなたは、私の姉の岡野蘭子じゃない、新子さんだ。この目に、姉など浮かんでこない。

蘭子 浩介。 「浩平の手を解く」 駄目よ、あなたは弟だよ。

浩平 「顔を歪め」 姉さんじゃない、蘭子じゃない、新子だ。

蘭子 多分あの石橋は壊される、岡野十郎家の百年も終る。それでも、水之口橋のように残る橋もある。またこうしてあんたと会えて、新しい時代が来たような気がする。

浩平 「項垂れて」 蘭子であって欲しくない、あなたは姉じゃない。

蘭子 「言い聞かせるよう」 姉だよ、真正正銘の姉だよ。未練たらしい、さあ涙を拭きなさい。

あんたのお父様は、どうして死んだか知ってるの。

浩平 知っています。だからこそ、二重橋と同じ石工たちが架けた橋、これから伝説になるであろう、石橋の話を芝居に仕立てた。

蘭子 だけど橋を架けた石工たちの、魂の物語だけではない。曾祖父たちの水之口橋の別れ、二重橋前での父の自決、これらのことがあった橋、そのものに魂が籠っています。そして橋を南へ行った人の宿命が私やあなたになった。

*二人が暫く見詰め合う。

浩平 新子姐さん、もう一度抱きたい。

蘭子 あんたの姉としてなら、抱かれて上げる。

*無言で蘭子を抱き締め、やにわに口付けをする。蘭子が抗うが、諦め暫くそのままにさせ、やがて身を離す。

浩平 許して下さい、もう新子と呼ばない。「蘭子の顔を見詰めて、走り去る」

第四場 勝越橋の河岸

*倉庫街を背にした河岸、橋梁がランタンに照らされる。下は見えないが船着場となる。岸壁に和服姿の

新子。前にビール瓶の空箱、目出帽で顔を被った国夫が登場。

国夫 「新子に向かい」 新子とも蘭子ともお別れだ。このボートで港の船に乗り込み、船員になって俺の国に潜り込む。運が良ければ又会えるだろう。

新子 「叫ぶように」 国夫行かないでくれ。あたいが黙ってりゃ済むことだろう。

国夫 俺が国を出たら、お前を捜している連中に、預り物を渡したのは俺だと告げればいい。もう後の祭りだ、これから、お前に付きまとうこともあるまい。

新子 自分の生まれた国を、捨てると言うのかい。

国夫 「河面を向き」 俺は父と反対に、この国を出て行く。祖母が捨てられ父が憧れた国を、今度俺が捨てる。

新子 あたいが居なくなれば、あんたの正体は誰にも知られない。この国を出て行かなくても、済むんだ。

国夫 「問詰める」 新子お前はこの前、俺のポケットから。

新子 そうさ、あの薬を一つ戴いて持っている。

国夫 「詰め寄る」 返すのだ。

新子 「一歩下がる」 いやだ。あんたは、あたいを助ける為に出て行くのか、それとも。

国夫 お前の為じゃない。
新子 「訴えるように」 あたいの為だと言っとくれ。そうすれば、あたいは、あんたの為に死ぬる。

国夫 遅かれ早かれ、俺の正体は敵に分かる、だから出て行く。

新子 「横を向く」 そうかい、それじゃ早く出て行きな、もう会いたくもない。

*同じく目出帽を被った金太が登場。

金太 お兄さん、向うの準備は整ったようだよ。早くボートを乗り付けなきゃ。

「新子に気付き」 おや新子姐ねえさん、もう国夫兄さんの名前を出しても、大丈夫だよ。

*ストッキングを被った三人（紅屋一家）の男たちが登場。

男甲 「国夫を見つけ」 とうとう見つけたぞ、蘭子をつけて来たら、ようやく捉えた。どうやら新子蘭子は同一人らしい。敵さんは今からどこかへ、逃亡する積りらしいが、そうはさせないぜ。

*新子がボートの方に消える。

国夫 「三人に対し身構え」 そうか、ようやくお前らと巡り合えたか。今まで俺の正体は明かさなかったが、どうせこの国ともおさらばだ。顔を拝ませてやろうか。

金太 お兄さん、まだ危険だよ。

国夫 もういい、丁度いい機会だ。その代わり、新子に手を出すんじゃないねえ。彼女は偶々行きずりの男に、密書を手渡されただけだ。結社とは、何の係わりもない。 「目出帽を脱ぐ」

男乙 あつ、やはり国夫兄い。

国夫 何だ、お前たちは、俺の名を、

*一人がストッキングを脱ぐと、紅家一家の甲の顔。

国夫 まさか、お前たち、政府側の一味だったのか。

男丙 紅家一家べにやの中が怪しいと睨んで、三人が組に潜り込んだ。探っているうちに、あんたが臭いと睨んでいたが確証が無い。それでこの前、芝居の座長に難癖なんせきをつけて、あんたのしまに連れ出したんだ。騒ぎを起こして、警察にあんたの暗いところも洗わせようとした。

男甲 その後新子との係わりが出てきて、今正にあんたの正体は露見した。俺たちは同国人でも、敵味方だ。あんたの身柄を預からしてもらうぜ。場所柄武器は使わないが、大人しく来てもらおうじゃないか。

*三人が国夫を取り囲む。一人が飛び出し乱闘となる。そこへ易者が登場、鮮やかな手際で三人を倒し気絶させる。金太はおろおろしている。

国夫 おつ、易者さん有難う。

易者 危ういところだった。この連中は自分たちの車の中で、暫く眠っておいてもらおう。車のドアは、中から開かないようにしておいた。

*二人で三人を引きずって行き幕外へ。

金太 どうなることかと思つた。そうそうさつきから、新子姐さんが居ない。

国夫 しまった。

*ボートを出す音、慌てて国夫が船着場へ下り、姿消える。

新子の声 国夫、いま隅田川にいる。朧おぼろの月が奇麗だよ。瓶に入ったこの命の水も、月光に照らされ澄みきっている。勝越橋かちこしはしの鉄骨にランタンが輝いている、何て荘厳な物体だろう。あたいは新子だよ。今かぐや姫になったような気分だよ。

あなたの為に、命を捨てられるなんて、なんと幸せなんだろう。少し苦しくなったけど、何だか楽しい気分だよ。この水はかぐや姫からもらった、不死の霊薬かな。橋の上に懸っている月から、音楽が聞こえてくるみたい。

国夫の声 戻れ戻れ、新子。たった今俺は、敵に正体を明かした。もうお前は俺のことで、連中に狙われることはない。

新子の声 だけど、あなたは行くんだろう。もう会えない。あたいは生きても死んでも同じだ。だけど最後は、お前に抱かれない。戻るよ。

*ボートの音。国夫に抱かれて、新子が上がって来る。

国夫 新子、遅かったか。

新子 国夫、あなたはこの水を、あたいに飲ませたくなかったんだ。嬉しい。

国夫 「新子をビール瓶の空箱に座らせる」 すぐ病院に行つて、処置してもらおう。

新子 「ぐったりして」 もう遅いよ、それにこの命の水のことを、病院に何と説明するの。あたいが居なくなれば、あなたはこの国に残れる筈だよ。あなたが生れた国に。

国夫 お前は、俺の為に、

新子 そう、あなたを自分の生まれた国で、生きさせたかった。よその国へ行かせたくなかった。

お父さんの憧れた国、お祖母さんが夢みた国へ、居させたかった。あたいは初めて、自分の為でなく、他人ひとの為に血を流せる。

*バヤンと浩介が駆けつける。易者と金太が戻り、経緯を話す。

バヤン わたしも、国夫さんとお別れに来たのに。どうしたの、新子姐さん、具合悪いの。

新子 バヤン、あなた九州へ行つて来たのかい。

バヤン 行つて来たよ。そして姐さんから頼まれた、石橋の欠片かけらを持って来たよ。

*欠片を新子の手握らせる。

新子 バヤン、有難う。これは私の魂の欠片。ほら石なのに、いのちが籠かごっているように、キラキラ光っている。あなたの国にも、行けなくて残念だった。神様のいらっしゃる山を、拝みかけた。結婚はしなくても、一度あなたと行つてみたかった。

あなたが言っていた、自然の石で作った橋を見たかった。お国はきつと、あなたみたいな、優しい人ばかりだろうね。賽さいの川原で子供が積む石を、崩すような鬼は居ないよね。でも私が心の中で積んだ石は、大きな橋になったよ、私は橋を渡つて行くんだ。夢じゃ無いよ。

浩介 「新子の手を握る」 姉さん、姉さん、確りして。

新子 浩介、たった一人の私の弟。あれから二度会ったね、楽しかった。けどいやだよ、あなたはいつも、憧れの女性を見るような眼差しで、私を見る、私は姉なんだから。あなたは四歳

の時から、ちつとも変わってやしない。聞き分けがないんだから。

浩介 「抱き締める」 姉さん、もっと早く会いたかった。

新子 「苦しい息で冗談めかし」 あなたは弟として、私を抱いて呉れてるんだ。それなら許して上げる。私の命はあの石橋と一緒に消える。だけどあんたは、まだ生きている石橋の芝居を上演して、観客を感動させた。だから人の心に、石橋は残って行くのよ。

事実と真実は違う、人の心に残るのが真実だ。皆の心に、共感を呼ぶ芝居は真実なんだ。私の一生も芝居になれば、真実になるのかな。

浩介 姉さん、あなたは、二人の女性として生きたけど、僕は二人共信じる、二人共真実を貫いて生きた。二人で遊んだ、あの昔の石橋は消える。だが二十年かけても三十年かけても、僕は芝居で、新しい心の橋を架けてゆく。人の心は不毛だとは決して思わない。

僕は人を信じる。あの石橋は、近代に入った日本の象徴だった、そして姉さんも一緒に消えてゆく。だが二重橋の石橋は、まだ生きている。曾祖父たちが別れて行ったあの石橋は、百年経ってもまだ息づいている。僕も新しい国の未来を信じて、生きてゆく。

新子 嬉しい、あんたからそんな言葉を聞けて。苦しい、母さん母さん、御免なさい。

私をこの世で一番愛してくれたのは、岡野のお父様とお母様だわ。私の一生は、あの手紙の通りだったわ。日が照っているのに雨が降って、嬉しくて悲しくて、日向雨ひなたあめのような日々。でもお母様だけが心の支えだったわ、許して。

浩介、あんたには岡野の血が流れている。私の代わりに母さんを頼むよ。 「苦悶の表情」

国夫、どこにいるの、もう目が見えなくなってきた。あんた本当に行ってしまうの。もうどこにも行かないで、最後に私を抱くのはあんただよ。

国夫 「新子の手を握り」 新子、待ってろよ。俺たちはやはり石橋の申し子だ。俺は今この国に骨を埋める。神様が授けて呉れた、この水をさつき戴いた。

金太 「おろおろして」 国夫兄さん、いつの間。

国夫 もう遅い、神様から頂いた水が、五臓六腑に沁みわたった。新子、この前聞かせたろ、夢見るものには金属製の檻かごなど愚かな否いなだ、そろそろ動物園のヘイモーンと、洒落のめそうぜ。

これから、俺たち二人の夜が来る。少々苦しくなってきた。あの世へ着いたら、お前と二人で、半旗ならぬ万国旗を賑やかに上げようぜ。

新子 だめだよ国夫、あんたはあんたの国の旗を掲げなきゃ。でも私の父みたいになってはいけない。でも聞かないかもね、あんたは私の父とそっくりなんだから。

*一幕五場の娼婦二人が登場。

金髪 新子姐さん、さつきから聞いていたが、国夫を見送りに来たのに、こんなことになるとは。

黒髪 国夫兄さんまで一緒に、悲しいけど、二人が羨しい。

新子 有り難うよ、二人とも不景気に負けないで、確り稼ぎな。何たって、この国で外国人の草分けなんだから。

*二人とも号泣して新子に取り纏る。

新子 「声を振り絞り」 そうかい国夫、もう神様からその水を戴いてしまったのかい。

嬉しい、私はずっとあなたを好きだった。あなたのお蔭で、私は新子でもない蘭子でもない、新しい一人の女性になれたような気がする。私とあなたは二人並んで、橋を渡ったんだ。

浩介、あなたの芝居とおんなじだ。嬉しい。皆左様なら、お母様左様なら。

*新子が息絶える。国夫が新子を抱き締めるが、自分も頼れる。バヤンは放心状態となる。

易者 「国夫に向かつて」 この前も言いかけたが、私も元々お前と同国人だった。二重橋メーデー事件の時、デモ隊に加わって負傷した私を、通り掛かったお前の父が庇ってくれた。だがその際不幸にも事件の巻き添えになり、それが原因でやがて命を失う羽目になった。

その後、私は顔を知られていないのを幸いに、中立の立場で、この国でお前たちをそれとなく、監視する役目を帯びていた。お前が恩人の子息と知り、今回の事も、出来るだけ手を尽くした。だがこんな結果となった、もう遅いが、責任は感じている。

国夫 「辛うじて立ち上がり」 そうか、親父のことはまあいい。俺こそ、ここまであんたに世話になった。礼を言うぜ。 // 仏には桜の花を献れ 我が後の世を人とぶらばはば

新子から聞かされた歌だ。散華するように、橋の下に花びらが流れて来る。

そろそろ俺もお陀仏だ。人は皆それぞれ出があり引つ込みがある。俺には最後まで、難しい理屈は要らねえ。やくざで物好きな某国の二世が、男気を出して助けた女と心中した、とでも報告してくんな。道化た一生だったぜ。

じゃ易者さん、まずボートを自動操縦で、隅田の川の真中まで出して呉れ。そこで念のため用意した、例の装置を起動してもらう、それが二人の弔いだ、時ならぬ精霊舟だ。

金太、世話になったな。神様抜きでも、感動することがあれば、人間らしい気持をきつと取り戻せる、と易者さんは仰有った。全くその通りだ。もう息が続かねえ。俺は途中ではぐれちゃまった卑怯者だが、後の結社のことは任せろ。達者でな。易者さんにも頼みましたぜ。

金太 国夫兄さん、分かった。兄さん程の力量はないが、俺は俺の道を歩む。スカートを穿いたカリフラワー頭の金髪男は、俺なりのこの国での痛快な自己韜晦だった。

俺は全てを脱ぎ捨てて、堂々と祖国に渡る。そして混沌の渦の中で、人間らしい気持ちに共感出来る人々の、連帯の輪を広げてゆく。安心して呉れ。

*国夫が頷き、金太の手を握り締め、新子の上に重なり息絶える。

皆が二人の前に跪く。

易者 二人をボートに乗せ、国夫の云う通りにしてやろう。せめてもの供養だ。責任は私が持つ、国夫の父は私の恩人だ。粹だが不器用で、最後までへぼな人生を貫き通したが、死なすには惜しい、いい奴だった。

バヤン 「立ち上がり」 待つて下さい、新子さんの胸に、石橋の魂をしっかりと抱いてもらいましよう。 「石橋の欠片を、胸の両掌に抱かせる」

*皆で二人を船着場へ運び下ろす。やがてボートの出て行く音。皆が岸に上がって来る。易者が起爆装置を取り出す。

易者 「金太に」 あんたが、このボタンを押すのだ。もう二人とも、この世のものじゃない。弔いには、あんたが一番相応しい。国夫も新子も、喜んで呉れるだろう。いま河面に他の船舶はいない、チャンスだ。 「装置を渡す」

金太 私はボタンを押せない。

易者 「冷静に」 政治運動に携わるものが、それ位出来なくてどうする。相手は亡骸だ、水葬だと思えばいい。美しいものを追うには、己の感情を殺さねばならぬこともある。

国夫はそれが出来なかった、愛とこの国への思い入れが勝ち過ぎたのだ。そして新子と二人で、石橋の伝説の中に消えて行った。

お前には出来る、押せ、押すのだ。理想の霞を食っても、生きてはゆけぬ。

金太 「苦渋の面持ち」 なんてあんたは冷静なんだ。私はこの指を呪ってから、押してやろう。

易者 「河面を見やり」 今人々は、この国の豊さを信じ蜜蜂のように集う。かつては貧しさゆえにこの国を出て、その地で命を落す者もいた。かつては信じるものが崩壊して、死を選ぶ者もいた。そして今愛が成就し、己の有りようを確かめて、消えてゆく者もいる”

これが、せめてもの弔いの言葉だ。

浩介 「易者と並ぶ」 この世にあって、悲しみがありません。人々は果てしない空想の朝餉あさけを食べ、夕べには現実の汚泥を排泄する。ここはすべての流れ着く東の果ての地。石橋と共に消えた、二人の魂よ、安らかなれ”

易者 「川面を見やり」 ボートは橋から遠退いた。そろそろいいだろう。世間には自爆ということとなる。だが念のためボタンの指紋は、私が付けておく。「金太の持つ起爆装置の蓋を開ける」
浩介 じゃ私も、いや三人で押しましょう。

*易者が頷き、金太、浩介、易者で掌を重ねボタンを押す。爆発音と閃光。易者がボタンに自分の指紋を、再びしっかりと付ける。

突然強烈な音楽が鳴り始め、娼婦二人が泣き乍ら、激しく踊り出す。金太も狂ったように、一緒に踊る。バヤンも立ち上がり、泣き乍ら踊りに加わる。易者と幸介は黙然と河を見守り、やがて合掌する。

〈幕下りる〉

詞引用一覧

- P5 謡曲 田村 世阿弥(室町)
- P5 長唄 京鹿子娘道成寺 藤本斗文(江戸)
- P10 新内 蘭蝶 初世鶴賀若狭掾(江戸)
- P16 謡曲 檜垣 世阿弥(室町)
- P16 謡曲 高砂 世阿弥(室町)
- P20 戯曲 臉の母 長谷川伸
- P20 地藏和讃 〴〵詠歌(仏教)
- P21 和歌 月みればちぢにもこのこそ悲しけれ 大江千里(平安)
- P21 遊びをせんとや生まれけむ 梁塵秘抄 今様(平安)
- P21 歌謡 この世に咲く花数々あれど 作詞 西城八十(この世の花)
- P26 歌謡 青い芽を吹く柳の辻に 作詞 佐々詩生(東京の花売り娘)
- P26 俳句 よろこびはかなしみに似し冬牡丹 山口青邨
- P27 武士は食わねど高楊枝 かるた句 科白(江戸)
- P29 おお牧場は緑(チェコ民謡 訳詞複数人) 牛乳石鱈良い石鱈(作詞三木鶏郎)
- P29 雀百まで踊り忘れず かるた句(江戸)
- P33 童謡 ペチカ 作詞 北原白秋
- P37 和歌 散りぬれば後は芥になる花を 僧正遍照(平安)
- P40 和歌 仏には桜の花を献れ 西行(平安・鎌倉)
- P47 夢見るものには金属製の檻など 詩集 影の眼 茶番
- P49 人々は果てしない空想の朝餉を食べ 詩集 影の眼 アトモスフィア